

山梨市文化財調査報告書 第16集

# 薬師堂遺跡

— 牧丘東部地区用排水路第12号の整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2012年3月

山梨県峡東農務事務所  
山梨市教育委員会  
(財)山梨文化財研究所

山梨市文化財調査報告書 第16集

# 薬師堂遺跡

— 牧丘東部地区用排水路第12号の整備事業に伴う  
埋蔵文化財発掘調査報告書 —

2012年3月

山梨県峡東農務事務所  
山梨市教育委員会  
(財)山梨文化財研究所

## 序

本書は、山梨県峡東農務事務所による農業用排水路の改修に伴って行われた薬師堂遺跡発掘調査の報告書です。調査地の牧丘町千野々宮には国指定重要文化財の本殿を持つ中牧神社が鎮座するなど、古くからの歴史を残す地域です。

調査では縄文時代から弥生時代にかけての土坑5基などが検出されました。市内では弥生時代の遺構の発見は少なく、調査地周辺での発掘調査事例も少ないことから、貴重な資料となりました。

最後になりますが、調査を担当していただいた(財)山梨文化財研究所の皆様をはじめ関係各位に心から感謝申し上げます、序といたします。

平成24年3月15日  
山梨市教育委員会  
教育長 丸山森人

## 例 言

1. 本書は山梨県山梨市牧丘町千野々宮・窪平に所在する薬師堂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は牧丘東部地区用排水路第12号の整備事業に伴い、山梨県峡東農務事務所より委託を受けて(財)山梨文化財研究所が実施した。
3. 本書の原稿執筆・編集は、望月秀和が行った。
4. 発掘調査における基準点測量、ポール写真撮影、全体図作成業務を(株)テクノプランニングに委託した。
5. 本書に関わる出土品・記録類は、山梨市教育委員会で保管される。
6. 発掘調査から報告書作成に至るまで、以下の諸氏、諸機関からご教示、ご配慮を賜った。記して感謝申し上げます。(順不同、敬称略)。

保坂康夫 網倉邦生 野崎 進 中山誠二 佐々木満 稲垣自由 河西 学 櫛原功一 三澤達也 雨宮弘聡

## 凡 例

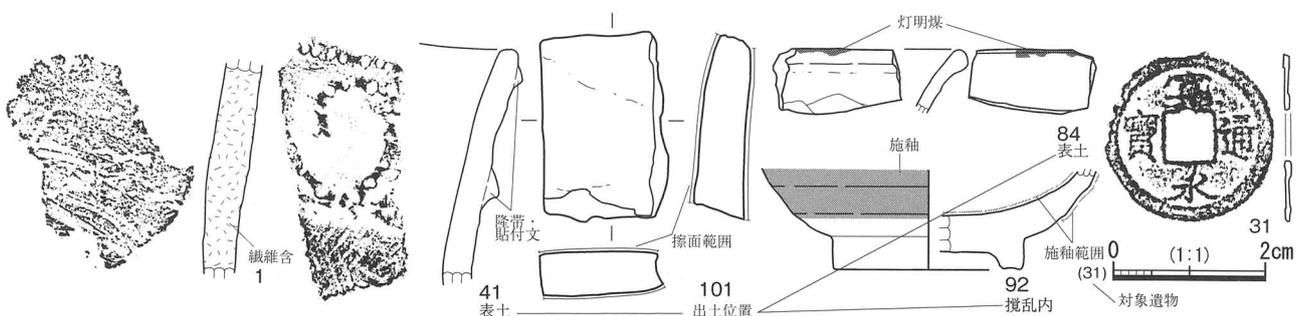
1. 本書におけるX・Y数値は、平面直角座標第8系(原点：北緯 36度00分00秒)、東経(138度30分00秒)に基づく座標数値である(世界測地系数値)。各遺構平面図中の北を示す方位はすべて座標北である。
2. 遺構および遺物の縮尺は次のとおりである。

土 坑 (SK)、溝状遺構 (SD) : 1 / 40      ピット (Pit) : 1 / 40      全体図 : 1 / 80  
土 器 : 1 / 2      石 器 : 1 / 2 (小型品は原寸大)

3. 本書に掲載した遺物の番号は、実測図、写真図版、出土位置を示したドットの番号全てを一致させた。また、その経過を示すため、観察表において対応する遺物取り上げ番号および実測番号を掲載した。
4. 遺構図版中の遺物点をつなぐ実線は接合した2点の接合関係、破線は同一個体である可能性を示す。
5. 遺構図中に示した遺物ドットは、各図版に凡例を示している。
6. 遺物実測図については下図の通り。

断面中の破線は接合帯(隆帯、貼付文など)、トーンは繊維含、遺物実測図の内外面のトーンは施釉、黒色ベタは灯明痕(煤)、断面外側の実線は擦り面範囲、薄い破線は施釉範囲を示している。

なお、図版中で縮尺を変更した遺物については、別スケールを付け、( ) 内にその番号を示した。



7. 土層説明における土色表示は農林水産省水産技術会議事務局監修『新版 標準土色帖』(2006年度版)を使用した。
8. 本書図版中に使用した元地図は以下のとおりである。
  - 第1・2図 国土地理院発行 1/25,000『川浦』及び工事設計図
  - 第5図(左上) 山梨市牧丘町千野々宮地区地籍図(任意縮尺)
  - 第5図(下) 国土地理院発行 1/200,000『甲府』
  - 第6図 山梨市 1/10,000『山梨市全図その3』
9. 参考文献については各章の文末にまとめた。

# 目次

例言・凡例	
目次	
表目次	
図版目次	
写真図版目次	
第1章 調査の概要	
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査の経過	1
第3節 調査の方法	1
第4節 基本層序と確認面について	2
第2章 遺跡の位置と歴史的環境	
第1節 遺跡の位置と地理的環境	4
第2節 歴史的環境	6
第3章 発見した遺構と遺物	
第1節 土坑	9
第2節 ピット	9
第3節 溝状遺構	12
第4節 出土遺物について	14
第5章 総括	
第1節 検出した遺構・遺物について	23
第2節 縄文時代早期末の遺物に伴う水晶片について	24
第3節 牧荘についての若干の検討	24
おわりに	

## 表目次

第1表 周辺遺跡一覧	6
第2表 遺構一覧	12
第3表 出土遺物観察表（土器・陶磁器類）	16
第4表 出土遺物観察表（石器・石製品類）	17
第5表 出土遺物観察表（古銭）	17

## 図版目次

第1図 対象地位置図	2
第2図 調査区配置図	2
第3図 調査区全体図	3
第4図 基本層序図	4
第5図 遺跡の位置	5
第6図 周辺の遺跡	7
第7図 遺構図（土坑）	10
第8図 遺構図（ピット）	11
第9図 遺構図（溝状遺構）	13

第10図	出土遺物 (SK1・3・4、Pit1・2・7)	18
第11図	出土遺物 (SD1、調査区西端)	19
第12図	出土遺物 (遺構外・試掘1)	20
第13図	出土遺物 (遺構外・試掘2)	21
第14図	出土遺物 (遺構外・試掘3)	22
第15図	出土遺物 (石器・石製品)	23

## 写真図版目次

図版1	調査区周辺景観、調査区空撮 (モザイク写真)
図版2	調査前・完掘後近景
図版3	遺構写真 [SK1～5]
図版4	遺構写真 [SK5、Pit1～4・6～10・16]
図版5	遺構写真 [Pit11・13・15、SD1]
図版6	調査風景、埋め戻し状況、検査・確認状況、周辺写真 [御堂 (精進家屋敷神)、中牧神社]
図版7	遺物写真 [SK1: 1～4、SK3: 5～11、SK4: 12～14、Pit1: 15～17、Pit2: 18・19、Pit7: 20、SD1: 21～31]
図版8	遺物写真 [調査区西端: 32～39、遺構外・試掘: 40～53]
図版9	遺物写真 [遺構外・試掘: 54～76]
図版10	遺物写真 [遺構外・試掘: 77～95]
図版11	遺物写真 [石器・石製品等: 96～102、調査区出土石英 (水晶) 片: 1～8、市教委調査区出土墨書土器]

### [発掘調査日誌]

平成23 (2011) 年

- 1月7日 (火) 計画準備
- 1月11日 (火) 基準点測量、周辺に事前挨拶。
- 1月12日 (水) 現場機材搬入。
- 1月13日 (木) 表土剥ぎ、調査区整形。
- 1月14日 (金) 調査区整形、包含層掘下げ。
- 1月17日 (月) 包含層掘下げ。確認面精査、一部半截。
- 1月18日 (火) 遺構掘下げ、実測。
- 1月19日 (水) 遺構掘下げ、実測。
- 1月20日 (木) 遺構掘下げ、実測。
- 1月21日 (金) 遺構実測、写真測量、全景撮影。
- 1月24日 (月) 遺物整理、機材撤収。
- 1月25日 (火) 埋め戻し、機材撤収。
- 1月26日 (水) 機材撤収、データ・遺物基礎整理。
- 1月27日 (木) データ・遺物基礎整理。
- 1月28日 (金) データ・遺物基礎整理。

# 第1章 調査の概要

## 第1節 調査に至る経緯

山梨県は、山梨県牧丘町千野々宮地内において、農業基盤整備事業の一環である牧丘東部地区用排水路第12号の整備を計画した。事業主体となる山梨県峡東農務事務所は、山梨市教育委員会に埋蔵文化財の有無について照会した結果、計画地は周知の埋蔵文化財包蔵地、薬師堂遺跡の範囲内であることが判明し、平成22年8月31日付で文化財保護法94条の通知が市教育委員会に提出された。市教育委員会は、同年9月1日に山梨県教育委員会へ進達、同9月17日に県から試掘の旨回答があり、同9月28日に峡東農務事務所へ伝達した。

試掘調査は平成22年11月8日～19日に市教育委員会が実施した。対象地に4箇所の試掘坑を設定（第2図TP1～4）したところ、土坑・ピットの検出と土師器や縄文土器の出土が確認された。市教育委員会は、試掘調査の結果、遺構が検出される可能性があるとして、掘削を伴う水路改修部分については本調査の実施が必要と報告され、本調査の実施に至った。

本調査は、山梨市・山梨県峡東農務事務所・財団法人山梨文化財研究所と協定を締結した上で、発掘調査業務委託として峡東農務事務所と山梨文化財研究所が委託契約を締結し、平成23年1月7日～28日にかけて実施した。整理作業並びに本報告書の刊行業務については、平成23年4月に峡東農務事務所と山梨文化財研究所で委託契約を締結して事業にあたった。調査体制は以下のとおり。

### 調査体制

調査主体	財団法人山梨文化財研究所
調査担当者	望月秀和（財団法人山梨文化財研究所調査員）
発掘調査参加者	窪田信一、武井美知子、筒井聡、保坂悌司
整理作業参加者	竜沢みち子、櫛原ゆかり
事務局	柳本千恵子、横田杏子

## 第2節 調査の経過

発掘調査業務は、平成23年1月11日より着手し、調査の事前準備として基準点の設置、周辺住民へ調査実施についての周知を行った。調査機材の搬入は順次行い、13日より重機による表土掘削を開始した。掘削の際は随時土層確認をしながら進め、17日までに包含層掘削と遺構確認面の精査を行った。21日には検出したすべての遺構を完掘して、ポール撮影による調査区全体の写真測量を実施した。遺構の観察記録と周辺調査、機材の撤収および重機による埋め戻し作業を25日までにやり、延べ14日間の発掘作業を終了した。

現場作業終了後、基礎整理として出土遺物の洗浄・分類、遺構・遺物データの整理・保管作業を実施し、あわせて調査概要報告書をまとめ、28日に市教育委員会へ提出して発掘調査業務完了となった。なお、市教委担当による調査進行状況及び掘削状況等の検査・確認は、表土掘削前と表土掘削完了後の段階を13日、包含層掘削完了後の段階を17日、遺構掘削完了後の段階を21日に実施して頂いた。

整理・報告業務については平成23年4月に業務契約を締結し、遺物の注記・実測図作成・写真撮影、遺構図の編集・図版作成、報告書原稿執筆・編集作業を順次実施した。平成24年3月に本報告書を刊行し、調査に係るすべての業務を終了した。なお、発見した遺物及び調査データは、山梨市教育委員会で保管される。

## 第3節 調査の方法

今回の発掘調査は、既存水路を取り壊し、新たな排水溝を設置する工事に伴って実施したものである。当初、市教育委員会より指示された調査範囲は、長さ約16m、幅約2mの水路の形状に沿った弓型の範囲（約32㎡）を対象としていた。現地確認の際、対象地の大半が積み石と盛土によって構築された畑地境であることが判明した。さらに、試掘成果から推定する遺構確認面が地表面から40～60cmの深さであったことから、既存水路によって攪乱されていることが予想でき、遺存状況の悪さが懸念された。そこで、調査精度の向上と作業の効率化を図って市担当者との現地協議を行い、調査区を南側の水路の攪乱が及んでいない範囲まで拡張した細長いD字形とすることになり、調査範囲は東西約18m、最大幅約3.3m、約51㎡を測った。

調査の方法については、重機による表土掘削の後、人力によって包含層掘削、遺構確認、遺構掘下げと順次進めた。調査区の一部は調査終了後に畑地に還ることを考慮し、既存のU字溝と畑境の石積みの除去の際は、できる限り廃土と石材等の分別に努めた。また、厳寒期に実施した調査であったため、霜柱対策としてブルーシートを複数枚用いて、遺構面の養生に努めた。

調査記録については、遺構断面図の作成・基本層序および遺構埋土の観察記録・遺構深度の計測と、光波測量による平面図作成・遺物の3次元記録・簡易図化システムによる写真測量、およびポール撮影による写真測量（委託）を実施した。測量に用いた機器およびシステムは以下の通りである。

- 光波測量機器 /TOPCON GPS- III
- コンピュータ /Panasonic TOUGHBOOK
- 取り上げ・図化システム /CUBIC 社製 遺構くん
- 簡易図化システム (カメラ)

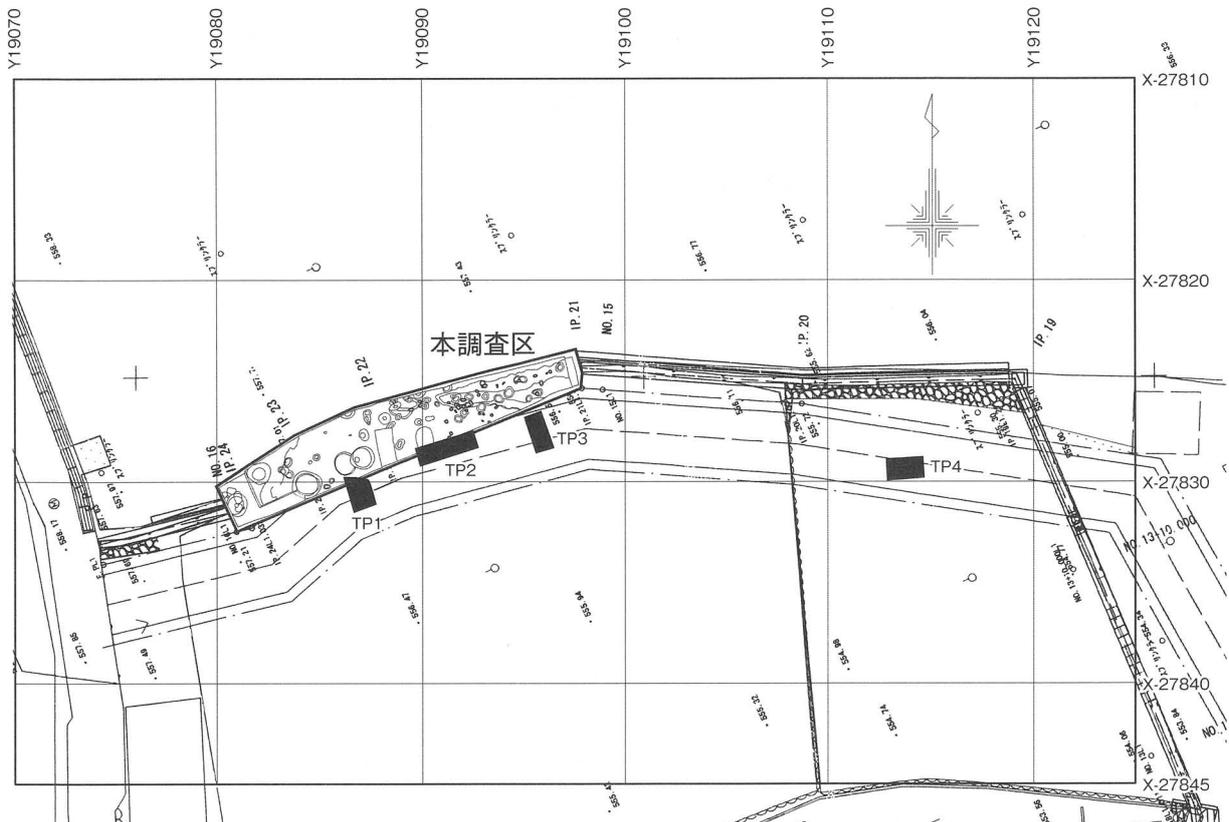
/Canon 50D +EF レンズ 20mm

#### 第4節 基本層序と確認面について

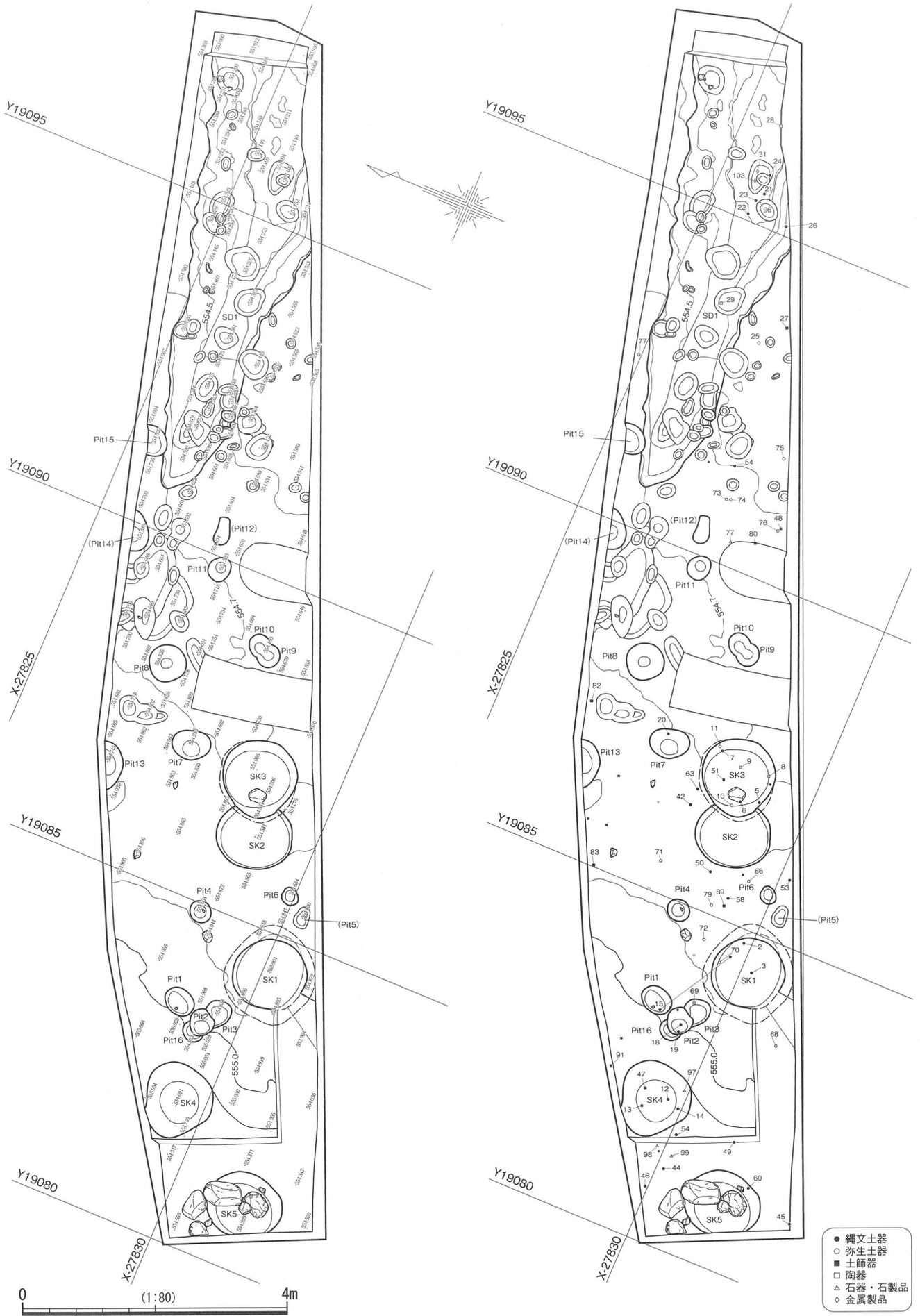
層序は、調査区の東西両端で観察した。基本層序については7層に分層し、調査区西壁セクション図（SK5断面図）に示した（第3図）。なお、現地の土地形状は西側が高く、南南東へ緩やかに下っており、調査区の東端と西端では約90cmの比高差がみられた。



第1図 対象地位置図



第2図 調査区配置図

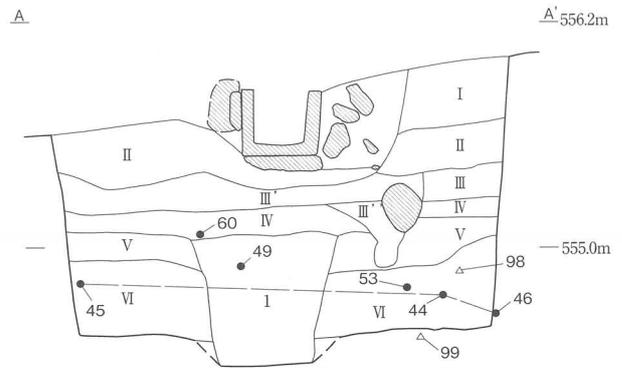


第3図 調査区全体図

I・II層は耕作土で、I層は切り土による盛土であった。III層は中世～近世段階の耕作層と考えられ、平坦面が調査区東まで続き、遺物を少量包含した。IV層は遺物包含層で、上層からの耕作または排水路設置による影響なのか、縄文・弥生時代の土器片が混在した。

遺構確認面としたV層は、地表面からの深さ約50～80cmあたりの黄褐色土層で、調査区東側に行くに連れて薄くなっていく。地山とした黄褐色ローム層(VII層)までの深さは、調査区東端で地表下約50cmを測った。また、調査区西端ではVII層と遺構確認面としたV層との間に黒褐色土層(VI層)が入り、地山面までの深さは約120cmを測った。なお、VI層には、SK4・5周辺において縄文時代早期段階の土器片や水晶片が

出土したため、調査区南壁際にサブトレンチを設定し、SK1までの立ち割りを実施した。しかし遺構の存在を示すような層的な変化は確認できず、遺物が混在する再堆積層(自然堆積層)と判断した。



I	10YR4/3 褐	表土。上段耕作土。
II	10YR3/3 暗褐	表土。下段耕作土層と対応。
III	10YR3/2 黒褐	炭化粒多含。白色粒子含。しまり有。上部より土器器出土。
IV	10YR3/2 黒褐	炭化粒少含。粒子細かい。しまり有。
V	10YR3/3 暗褐	黄褐色土がまだらに混。しまり有。遺構確認面。
VI	10YR3/2 黒褐	黄褐色土粒微含。しまり有。地山。
VII	10YR4/4 褐	ハードローム。地山。(調査区東側)

第4図 基本層序図

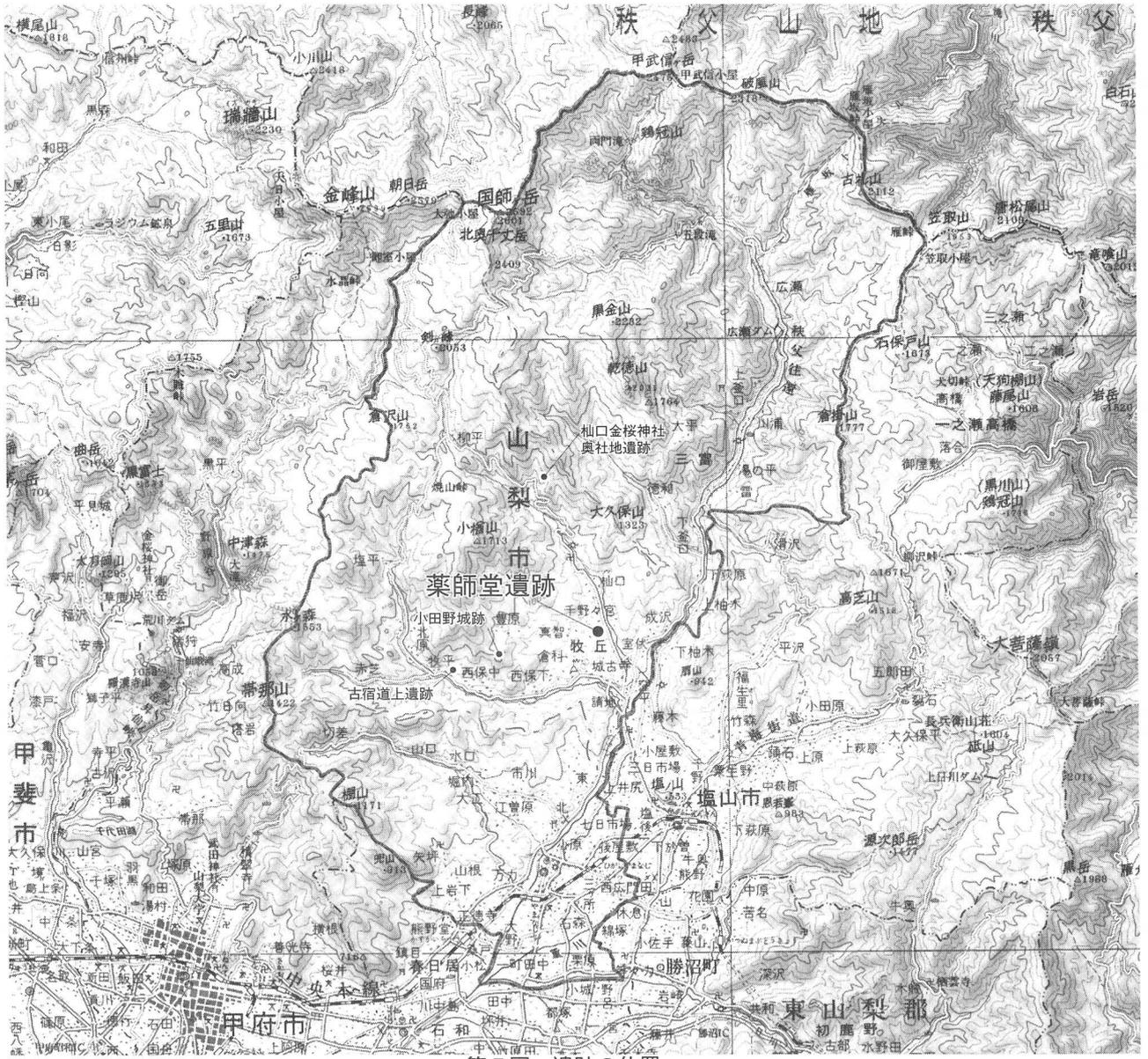
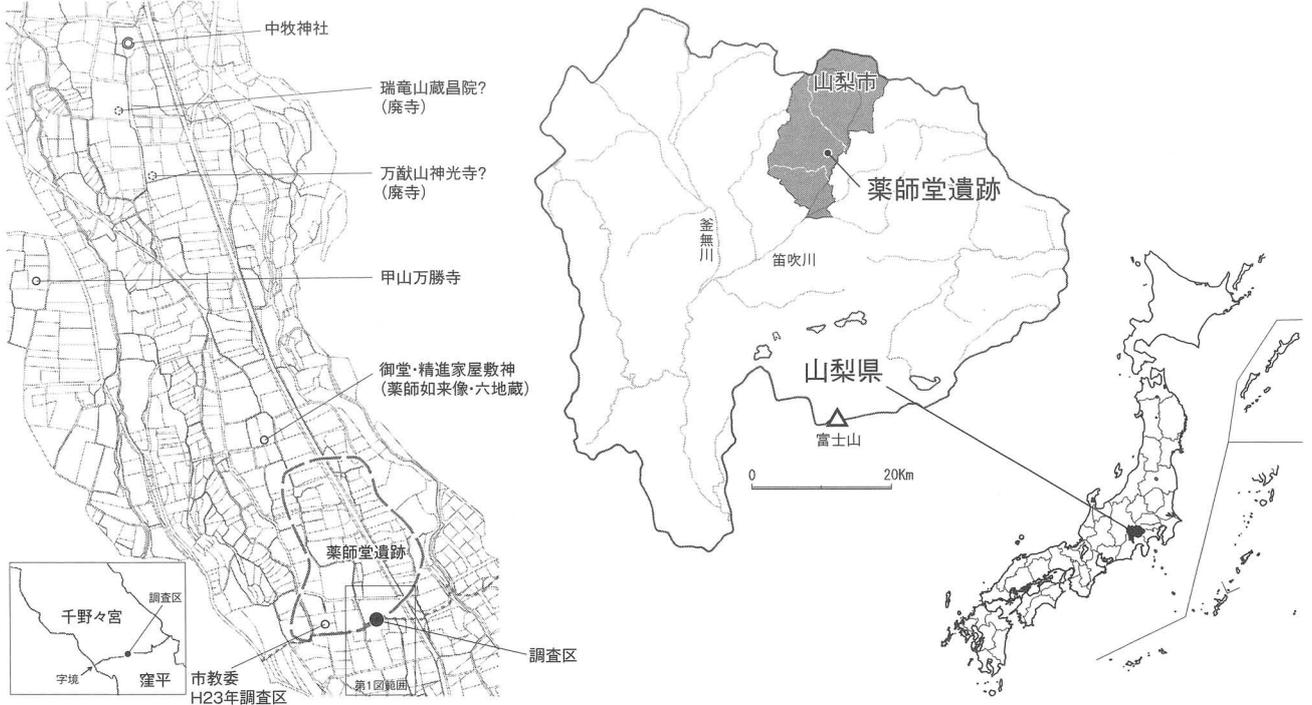
## 第2章 遺跡の位置と歴史的環境

### 第1節 遺跡の位置と地理的環境

薬師堂遺跡は、山梨市牧丘町千野々宮地内に所在する。同市は、平成17(2005)年に山梨市・牧丘町・三富村が合併し、総面積は289.87km<sup>2</sup>となった。市域の北端は埼玉県・長野県との県境にあたり、東から古礼山(2,112m)、水晶山(2,158m)、雁坂嶺(2,289m)、破風山(2,318m)、甲武信ヶ岳(2,475m)、国師ヶ岳(2,592m)、さらに朝日岳(2,579m)、鉄山(2,531m)、金峰山(2,599m)と峰を連ねる。市域の南側は甲府盆地北東端に面し、標高約310mの笛吹川流域に広がる低地帯となっている。遺跡が所在する牧丘町域は、井戸川・豊原・杣口といった山間より広がる小扇状地形が重なり合って形成された複合扇状地と、琴川や鼓川などの開析の影響を受けた緩急複雑な丘陵地・河岸段丘が発達した地域である。

山間地である同地域の開発要因であり、集落構成の特質となってきたのが、交通路と金峰山信仰である。本市域は、雁坂峠を越えて武蔵へ繋がる秩父往還道や、中世武田氏が雁坂口へ抜ける秘密街道として開いたとされる秩父裏街道が通り、交通の要衝となってきた。金峰山は、文武天皇の戊戌年(698)に大和の金峰山より蔵王権現を勧請した富士山と並ぶ甲斐国の山岳信仰の拠点である。『甲斐国志』に記載される登拝道九口のうち、万力道・西保口・杣口道が本市域に開かれ、東口と称されていた。西保口・杣口道はともに秩父街道に面する窪平から柳平間を結ぶ経路であるが、小檜山(1,713m)の西側を西保口、東側を杣口が通り、万力道は西保下で西保口ルートに合流している。西保口には、鼓川左岸の小田野山にある安田義定の要害とする小田野城跡や古宿道上遺跡や曲田遺跡などが分布する。杣口道については、本遺跡や中牧神社のある琴川右岸の河岸段丘を通る。このルートには、金峰山山頂にある五丈岩(蔵王権現)の山宮に対して里宮として甲府盆地各地の入山口に祀られた金桜神社が置かれている。

本遺跡周辺の地形については、比較的平坦で細長い傾斜地で現在は畑地や宅地として利用されている。調査区は県道210号杣口塩山線西側の畑地で、山梨市立牧丘第一小学校より北へ約400mのところ位置する果樹畑の畑地境にあたり、さらに千野々宮と窪平の字境にもなっている場所であった。調査区から北へ約800mのところには中牧神社があり、文明10(1478)年に築造された一間社流造の本殿が重要文化財に指定されている。同社は窪平・城古寺・杣口・千野々宮の総鎮守社であり、牧荘の中央に位置したことが社名の由来とされている。社記等では「千野々宮」が元の社名であるとし、『牧丘町誌』では六月晦に行う夏越の祭りに茅の輪潜りの祭事を行った格式の高い神社として、社名の由来を捉えている。



第5図 遺跡の位置

また、周辺には「寺屋敷」や「城古寺」など、寺院に関連した地名がみられる。千野々宮地内においては、『甲斐国志』や社記・寺記に江戸時代に中興開山された瑞竜山蔵昌院、万猷山神光寺といった臨済宗妙心寺派・恵林寺末の寺があったとしている。平成元（1994）年に刊行された『牧丘町の文化財』では、両寺ともに廃寺で、現在蔵昌院は石塔を2・3基を残すのみ、神光寺についても墓地のみが残るとしている。遺跡名及び小字名の「薬師堂」についての由来は定かではないが、千野々宮地内には薬師如来立像を祀る御堂と六地藏石幢が存在している。これらは現在、「精進屋敷」の由来となった精進家の敷地に「屋敷神」として祀られているものである。元は別の場所にあったものを移設してきたものらしく、同家では年に一度、御堂で酒宴をしていた事以外に詳細は伝わっていない。六地藏についても、円柱の幢身に宝永五年の銘があるが、笠・中台は四面で、龕部と石材も異なっているため、年代は明確ではない。

## 第2節 歴史的環境

山梨市では現在、旧石器時代～近世の埋蔵文化財包蔵地として、311遺跡が周知されている。第1表および第6図では、本遺跡を中心に旧石器から近世までの74遺跡の位置を示した。(注)

薬師堂遺跡が所在する牧丘町千野々宮には、千野々宮遺跡と称された遺跡が『牧丘町誌』（以下、町誌）にあげられている。現在、その範囲は明確ではないが、千野々宮地内には牧ノ前遺跡、大久保遺跡、精進屋敷遺跡等が周知されており、本遺跡とともに縄文時代または平安時代の遺跡として知られてきた。周辺における発掘調査の報告例は少なく、倉科字膳棚に所在する曲田遺跡（85）、同じく倉科字丸山に所在する奥豊原遺跡（43）、西保中字古宿に所在する古宿道上遺跡などが町誌や『山梨県史』等で報告されている。以下、各時代ごとの歴史的環境について、遺跡分布と調査事例を中心にまとめておく。

**旧石器・縄文時代** 旧石器時代については遺跡数が少なく、近年発掘調査の事例はないが、旧石器末細石刃時代の石核が発見されたとする井戸川遺跡（38）や、鈴の宮遺跡（53）・上野田東遺跡（58）などがあり、本遺跡の西側で分布が確認されている。縄文時代早期になると、井戸川遺跡・鈴の宮遺跡に加え、奥豊原遺跡・東大庭遺跡（63）、町誌に掲載されている須川道上遺跡等において押型文土器が出土しており、県内では古くからの遺跡が確認できる地域のひとつとして知られている。

発掘調査が実施された奥豊原遺跡では、早期段階の竪穴住居跡、炉穴、土坑などが検出されている。本報告が未刊のため詳細は不明であるが、住居跡からは三戸式の沈線文土器と台石、水晶・黒曜石製の石鏃や水晶製スクレイパーなどが発見されている。また、水晶に関しては乙女高原の所産と推定し、製品のほかに水

第1表 周辺遺跡一覧

遺跡No.	遺跡名	種別	時代
09006	薬師堂遺跡	集落跡	縄文
09018	在家道東遺跡	散布地	縄文
09019	在家道西遺跡	散布地	縄文・平安
09020	村ノ前遺跡	散布地	縄文
09021	井戸窪遺跡	散布地	縄文・中世・近世
09022	八幡山遺跡	散布地	縄文
09023	荒台遺跡	散布地	縄文・平安
09024	中田圃遺跡	散布地	平安・中世・近世
09025	西保丸山西遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
09026	西保下丸山遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
09027	法輪庵遺跡	散布地	縄文・平安・中世・近世
09028	北井遺跡	散布地	縄文・平安・中世・近世
09029	下木曾遺跡	散布地	平安・中世・近世
09030	真智遺跡	散布地	縄文
09031	西中尾遺跡	散布地	縄文・奈良・平安・中世・近世
09032	西奥遺跡	散布地	縄文・平安
09033	中尾1遺跡	散布地	縄文・奈良・平安・近世
09034	中尾2遺跡	散布地	縄文・平安
09035	高野遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安・中世
09036	堰下遺跡	散布地	縄文
09037	市地B遺跡	散布地	縄文・奈良・平安・中世
09038	井戸川遺跡	散布地	旧石器・縄文・奈良・平安・中世
09039	市地A遺跡	散布地	縄文・中世
09040	込山遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
09041	山寺遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
09042	御幸原遺跡	散布地	縄文
09043	奥豊原遺跡	散布地	縄文・奈良・平安・中世
09044	市地C遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
09045	西平沢遺跡	散布地	縄文・奈良・平安・中世
09046	丸山A遺跡	散布地	縄文
09047	丸山B遺跡	散布地	縄文
09048	二ツ塚遺跡	散布地	縄文・奈良・平安・中世
09049	田処遺跡	散布地	縄文・奈良・平安・中世
09050	西山遺跡	散布地	縄文・奈良・平安・中世
09051	山田遺跡	散布地	縄文
09052	滝の沢遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安
09053	鈴の宮遺跡	散布地	旧石器・縄文・弥生・古墳・平安・中世・近世
09054	大石遺跡	散布地	縄文
09055	上野田遺跡	散布地	縄文・弥生・古墳・奈良・平安・中世・近世
09056	西畑遺跡	散布地	縄文・平安・中世
09057	林組遺跡	散布地	縄文・弥生・平安
09058	上野田東遺跡	散布地	旧石器・縄文・奈良・平安・中世・近世
09059	田屋A遺跡	散布地	縄文・平安
09060	田屋B遺跡	散布地	平安
09061	松葉遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安・中世
09062	階遺跡	散布地	縄文・弥生・奈良・平安
09063	東大庭遺跡	散布地	縄文
09064	堰ノ内遺跡	散布地	縄文
09065	精進屋敷遺跡	散布地	縄文
09067	大久保遺跡	散布地	縄文
09068	牧ノ前遺跡	散布地	縄文
09069	横吹遺跡	散布地	縄文・平安
09070	砂原遺跡	散布地	縄文
09071	寺屋敷遺跡	散布地	縄文
09072	随当遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
09073	袖口西山遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
09074	東上遺跡	散布地	縄文
09075	上袖口遺跡	散布地	縄文・奈良・平安・中世
09076	青山遺跡	散布地	縄文・奈良・平安
09077	大久保遺跡	散布地	縄文・奈良・平安・中世
09078	清水窪遺跡	散布地	縄文・奈良・平安・中世
09079	中久堰遺跡	集落跡	縄文・平安
09080	丸山遺跡	散布地	縄文
09081	中牧城址遺跡	城館跡	中世・近世
09082	間瀬屋敷址遺跡	城館跡	中世・近世
09083	琵琶城址遺跡	城館跡	中世
09084	小田野城跡	城館跡	平安・中世
09085	曲田遺跡	集落跡	縄文・古墳・平安
09086	金桜神社奥社跡	社寺跡	縄文・平安・中世
09087	準遺跡	その他	中世・近世
09088	鍵懸閑跡	城館跡	中世
05166	丸山の烽火台跡	城館跡	中世
05169	西山城跡	城館跡	中世
05170	野青坂西城跡	城館跡	中世

(注)  
本表の遺跡No.は埋蔵文化財包蔵地一覧表（山梨市教育委員会2011）のままとした。  
なお、第6図では牧丘町域の遺跡は、遺跡No.の090を省略して表したのでご留意願いたい。

晶の原石や剥片が多数出土したことから、甲府盆地周辺の集落へ製品または材として供給した、水晶加工・中継集落と推定して報告されている。

同地域において明確な居住の痕跡として確認されるのは縄文時代前期からで、曲田遺跡で諸磯c式段階の遺物を伴った竪穴状遺構3基が検出されている。縄文時代中期になると、堀ノ内遺跡において耕作中に石囲いの中から遺物が発見されたことが町誌に記載されている。そのほか、古宿道上遺跡では縄文時代中期末の石囲炉と一部敷石を残した1号敷石住居跡、後期初頭で柄鏡形を呈す炉を交点にT字形に敷石が配置された2号敷石住居跡が検出されている。発掘調査の報告例は少ないものの、同地域では縄文時代の遺跡の分布



第6図 周辺の遺跡

が最も広範囲にわたっている。

**弥生・古墳時代** 弥生時代の遺跡は、前段階よりも遺跡数が大幅に減少するが、西部下丸山遺跡（26）や高野遺跡（30）、本遺跡を含む倉科字真智から窪平にかけての滝の沢遺跡（52）・鈴の宮遺跡・上野田遺跡（55）・林組遺跡（57）・階遺跡（62）などが周知されている。発掘調査の事例も少なく、集落遺構もまだ確認されていないが、河川流路近くの平坦地に遺物が分布する状況が看取できる。

古墳時代については西部下丸山遺跡・鈴の宮遺跡・上野田遺跡・曲田遺跡があげられる。周知される遺跡は少ないが、曲田遺跡においては古墳時代前期の住居跡13軒が確認されている。なお、住居跡の特徴として、周囲を土手状に囲んだ貯蔵穴を伴い、ほとんどが焼失住居であったと報告されている。遺物については、台付甕・器台・坏・埴等の他、紡錘車や高坏・底部穿孔の小形壺などが出土している。

**奈良・平安時代** 調査事例では、曲田遺跡で平安時代末の住居跡10軒が確認されている。特徴として住居隅に竈、その対角線上または長軸方向の壁側中間点に貯蔵穴を有し、柱穴4本をもつ点があげられている。また、鞆羽口や鉄滓、住居中央に楕円形の範囲で焼土が確認されており、同地域で鍛冶行為が行われた証左として重要な成果となっている。その他、古宿道上遺跡で竈1基、奥豊原遺跡でも土師器が出土している。

文献史料から、甲斐国は東海道に属し、山梨・八代・巨摩・都留の4郡に分けられていたことがわかる。牧丘町は山梨郡加美郷にあたり、その初見は正倉院宝物の『調庸白紵金青袋』の墨書銘「甲斐国山梨郡可美里日下 $\beta$ □□□□□紵一匹 和銅七年十月」である。これは甲斐国にみられる郡名の初見でもあり、和銅七（715）年には既にカミと呼称する地域が存在していたことがわかる。郷域は現在の山梨市八幡・日下部を中心に、後述する牧荘を含む範囲と推定されている。遺跡分布をみても縄文時代に次ぐ広範囲となっており、律令制および金峰山信仰の盛行に伴って山間地に開発が入ってきたことが窺える。

**中世・近世** 平安時代末から鎌倉時代初頭に活躍した安田義定の拠点のひとつが牧荘である。義定は清和源氏源義清の四男といわれ、治承四（1180）年の平家追討の際には、甲斐源氏の棟梁武田信義とともに挙兵の中心になった人物である。要害とした小田野城跡（84）付近には、西御所館跡や亥申屋敷、大門前、木戸口、射場、金屋敷などの地名が残る。「牧丘」の由来となった同荘名は、義定が開基した甲州市藤木の放光寺梵鐘銘「甲斐国牧荘放光寺 建久二年辛亥八月廿七日 従五位下遠江守源朝臣義定」が初見とされている。この梵鐘は貞治5（1366）年の作であるが、旧鐘の銘〔建久二（1191）年〕が移されており、同荘は少なくとも12世紀後半には成立していたと考えられている。荘域については荘内にあったとする寺社の分布から、山梨市八幡地区以北の甲州市松里地区から牧丘町を含む笛吹川上流一帯とされ、また別称として高橋荘とも呼ばれていたことから、一時期には竹森方面も荘域であったと推定される。さらに、甲斐市吉沢の羅漢寺蔵木造阿弥陀如来坐像の応永三十（1423）年像底銘には「甲州御牧庄天台山羅漢寺」とあり、「御牧庄」が同荘を表すのであれば甲斐市北東部・甲府市北部から鶏冠山麓に至る広大な範囲であった可能性が指摘されている。

建久5（1194）年に義定が源頼朝により処刑された後の同荘は、『鎌倉大草紙』に征伐を命ぜられた加藤景廉に地頭職が与えられたとあるが、鎌倉時代末期に二階堂道蘊が登場するまでの状況は明確ではない。嘉元三（1303）年に「牧荘主」が懇請して夢窓疎石を招き、浄居寺が開創された。牧荘主の実名は記されていないが、疎石は元徳2（1330）年に道蘊の要請によって再度甲斐国に戻り、恵林寺を創建していることから、道蘊もしくはその父が「荘主」であり、同荘を支配していたことが推定されている。その後、同荘内では武田信昌の頃に守護代跡部氏が小田野城跡を要害とし、武田信玄の頃には浄居寺を窪平に移転して再興したとする中牧城（中牧城跡遺跡：82）がある。その他、武田氏の頃は軍事上攻防の秘密道路、江戸時代には幕府御用林保護のための旧秩父裏街道の要所として赤芝集落に置かれた鍵懸関跡（88）や、30を超える廃寺があったことなど、伝承が多く残っている。

#### 参考文献

- 牧丘町 1980『牧丘町誌』牧丘町誌編纂委員会
- 牧丘町文化財審議会 1989『牧丘町の文化財』牧丘町教育委員会
- 山梨市教育委員会 2011『山梨市市内遺跡発掘調査報告書 2010』山梨市教育委員会
- 小野正文・信藤祐仁 1979「甲斐の押型文土器」『丘陵』第6号 甲斐丘陵考古学研究会
- 山梨県 1989『山梨県史』資料編1 原始・古代1 考古（遺跡）山梨県史編さん委員会
- 秋山敬 2003『甲斐の荘園』甲斐新書5 甲斐新書刊行会

### 第3章 発見した遺構と遺物

今回の調査では、土坑、ピット、溝状遺構を検出し、縄文・弥生・古墳・平安・中世・近世の遺物がプラスチックコンテナ（34×44×15cm）2箱出土し、総量約6kgを測った。遺構年代については、時期を断定できる資料の出土は少なく、いずれも小片であったため、ここでは検出状況から推定しておくことにする。

#### 第1節 土坑（SK：第7図/第10図）

SK1 [規模] 径110cm、確認面からの深さ92cm。[平面形態] 円形。[出土遺物] 縄文時代早期の土器片〔1〕、縄文時代前期の土器片〔2・3〕が覆土中より出土した。[特記] 断面は袋状を呈す。底面はほぼ平坦で、面積的には入り口部よりもやや広い。また、図化した遺物以外にも多数土器片が出土したが、いずれも小片で接合するものはほとんどなく、すべて覆土中からの出土であった。覆土は暗褐色土でしまりが弱く、底までほとんど変化がみられない堆積状況であった。遺物は堆積状況などから埋没した土壤に混在していたものと考え、上面と覆土内部では若干の時期差がみられ、確認面で検出した土器片と Pit1 覆土中で出土した土器片が接合している。

SK2 [規模] 長径114cm、短径108cm、確認面からの深さ27cm。[平面形態] ほぼ円形。[出土遺物] 図化遺物なし。縄文土器、弥生土器、土師器坏片の小片が出土している。[特記] 平面規模は他の土坑と大差はなかったが、確認面からの深さは最も浅く、底面は平坦であった。SK3と重複したが、遺物・断面観察ともに明確ではなく、遺構年代は断定できなかった。

SK3 [規模] 長径120cm、短径111cm、確認面からの深さ69cm。[平面形態] ほぼ円形。[出土遺物] 縄文時代早期の土器片〔5〕、縄文時代中期頃の土器片〔6・7〕、弥生時代の土器片〔8～11〕が覆土中より出土した。[特記] SK2と重複。上記のとおり、重複関係は不明。SK1ほどではないが、西側がやや袋状に掘り込まれており、底面は平坦であった。内部には約25cm大の礫が1つ混在したが、使用痕等は確認できなかった。覆土中および土坑周辺で弥生時代の遺物が出土した状況から、弥生時代以降と比定しておく。

SK4 [規模] 長径118cm、短径105cm、確認面からの深さ37cm。[平面形態] 不整円形（楕円形か）。[出土遺物] 縄文時代早期末から前期の土器片〔12～14〕、黒曜石〔97〕が出土した。[特記] 確認面では、上部からの攪乱の影響もあって西側のプランが不鮮明であった。完掘の形状は不整形となったが、断面観察による堆積状況の確認と遺物の出土状況から、土坑と判断した。覆土は2分層でき、土層観察から1層は縄文時代前期の遺物を含む遺構覆土、2層は掘り方もしくは地山直上であり、縄文時代早期段階の遺物が下層（地山層）に混在している状況が窺えた。

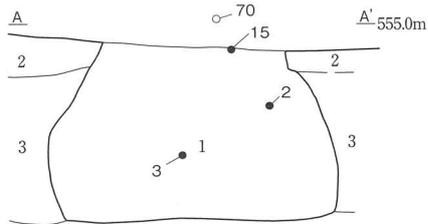
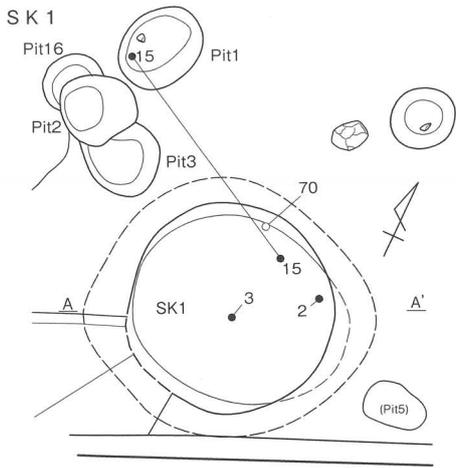
SK5 [規模] 調査区西壁と底部からの推定であるが、長径118cm、短径100cm、確認面からの深さは75cmを測った。[平面形態] 円形か。[出土遺物] 図化遺物なし。[特記] 調査区西端に設定したサブトレにより、調査区西壁の断面で確認した遺構である。サブトレは水路と石積みの攪乱のため遺存状況が悪く、またVI層のために確認面と地山が明確でなかったことから設定したもので、遺物はトレンチ内一括で取上げた。

本遺構の上部からは、約40～60cm大の礫が弧状に並んだ状態で確認され、礫周辺の精査にも努めたが、遺構プランを捉える事はできなかった。掘削後の断面観察から、礫は畑地の石積みの石材の一部であり、直接下部の土坑に伴うものではなかったことが判明した。

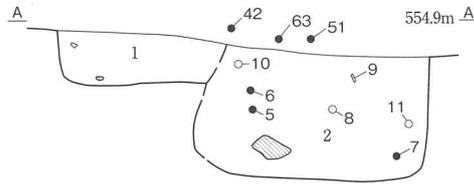
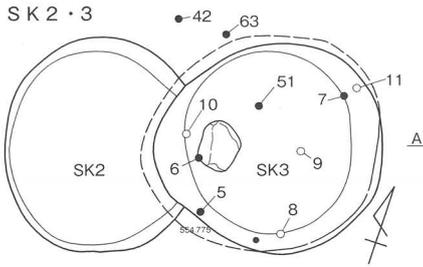
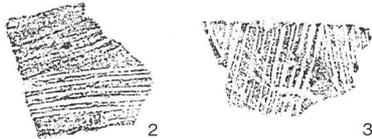
遺物については、本遺構付近で五領ヶ台式の土器片〔33～36〕の出土がみられたが、上記の通りサブトレ一括で取り上げており、出土位置が明確ではないことから、調査区西端〔32～39〕として掲載した。

#### 第2節 ピット（Pit：第7図/第10図）

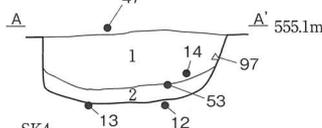
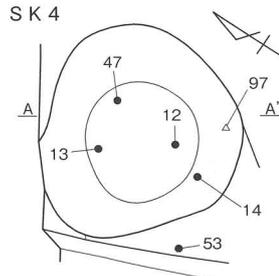
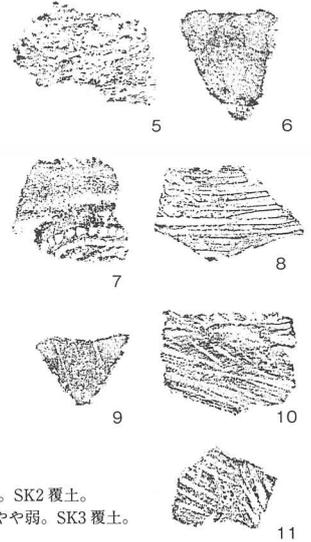
13基を確認した。確認面を精査した段階で Pit1～16まで付番したが、完掘した結果 Pit5・12・14は上部からの攪乱と判断し、欠番とした。今回の調査区は範囲狭小であったが、柱痕や礎板石等の建物等を推定する痕跡も検出できなかった。遺物は Pit1～3・7・8・10・11から出土したが、いずれも小片であった。Pit1から出土した〔15〕は、今回の調査区内で唯一接合関係が確認された遺物であり、SK1上面および調査区西端から出土した破片と接合した。その他、規模・平面形状・深さ等については、表2にまとめた。



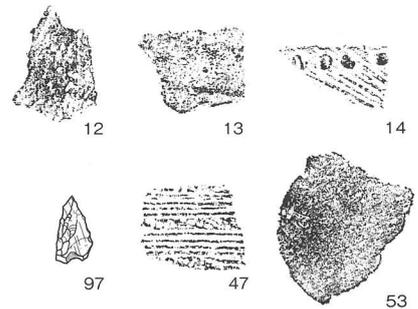
SK1  
 1 10YR3/3 暗褐 黄褐色土が疎らに混。しまりやや弱。炭化粒含。  
 2 10YR4/4 褐 暗褐色土がまだらに混。しまり強。  
 3 10YR3/3 暗褐 しまり強。径1~3cm 大の灰色土粒少混。



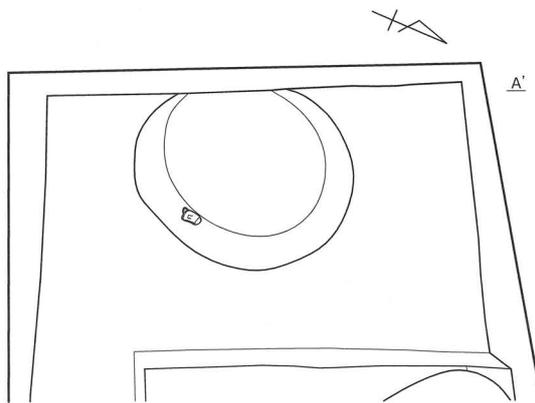
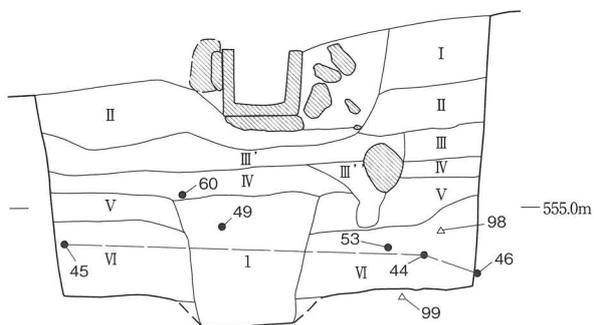
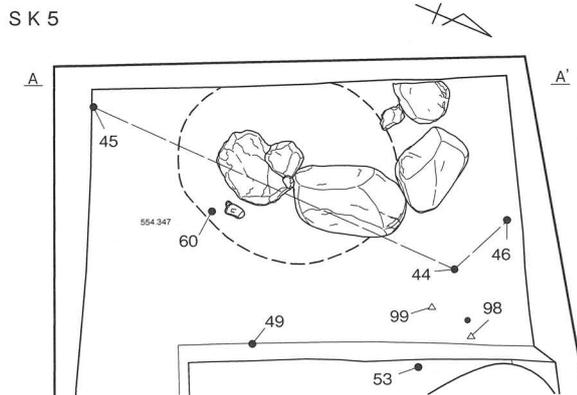
SK2・3  
 1 10YR3/3 暗褐 径2~3cm 大の礫微含。しまり弱。SK2 覆土。  
 2 10YR2/3 黒褐 黄褐色土少含。遺物包含。しまりやや弱。SK3 覆土。



SK4  
 1 10YR2/2 黒褐 黄褐色土粒混。しまりやや弱。炭化粒含。  
 2 10YR3/3 暗褐 しまり有。炭化粒含。

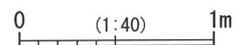


● 縄文土器  
 ○ 弥生土器  
 □ 陶器  
 △ 石器・石製品



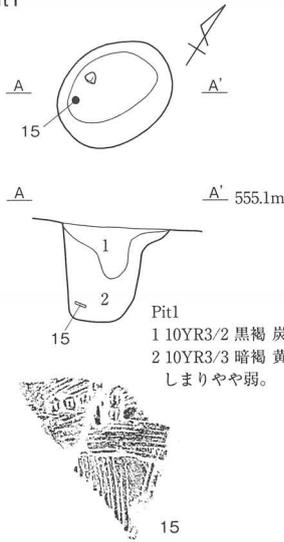
基本層序  
 I 10YR4/3 褐 表土。上段耕作土。  
 II 10YR3/3 暗褐 表土。下段耕作土層と対応。  
 III 10YR3/2 黒褐 炭化粒多含。白色粒子含。しまり有。上面部より土師器出土。  
 IV 10YR3/2 黒褐 炭化粒少含。粒子細かい。しまり有。  
 V 10YR3/3 暗褐 黄褐色土がまだらに混。しまり有。遺構確認面。  
 VI 10YR3/2 黒褐 黄褐色土粒微含。しまり有。地山。

SK5  
 1 2.5Y3/2 黒褐 黄褐色土粒多含。しまりやや弱。



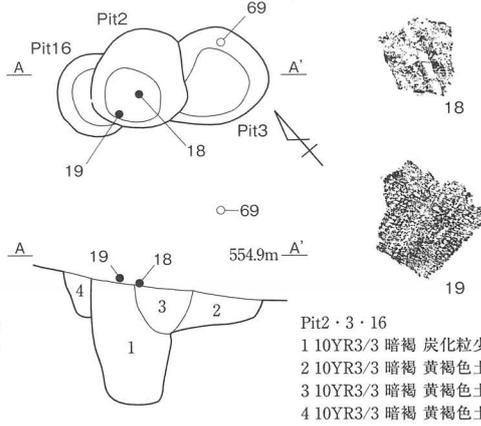
第7図 遺構図 (土坑)

Pit1



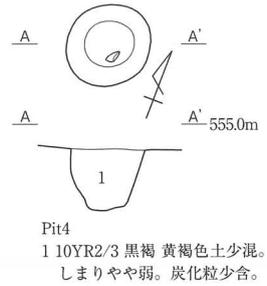
Pit1  
1 10YR3/2 黒褐 炭化粒少含。しまり弱。  
2 10YR3/3 暗褐 黄褐色土がまだらに混。  
しまりやや弱。

Pit2・3・16



Pit2・3・16  
1 10YR3/3 暗褐 炭化粒少含。しまり有。Pit2 覆土。  
2 10YR3/3 暗褐 黄褐色土混。しまり弱。Pit3 覆土。  
3 10YR3/3 暗褐 黄褐色土少混。焼土粒微含。しまり有。攪乱(根痕)か。  
4 10YR3/3 暗褐 黄褐色土混。しまり弱。Pit16 覆土。

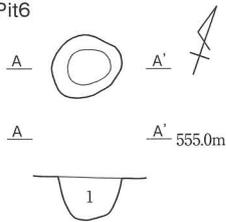
Pit4



Pit4  
1 10YR2/3 黒褐 黄褐色土少混。  
しまりやや弱。炭化粒少含。

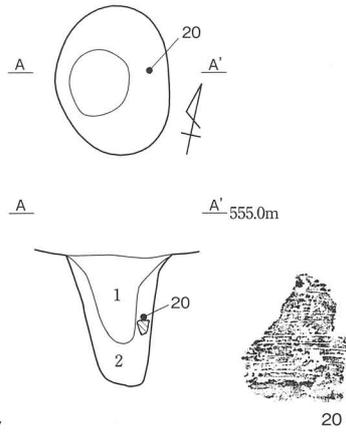
● 縄文土器  
○ 弥生土器

Pit6



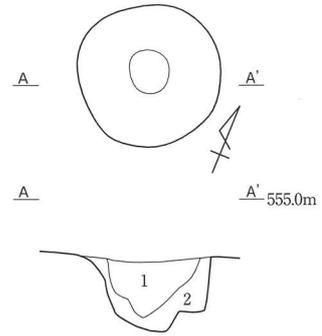
Pit6  
1 10YR2/2 黒褐 黒褐色土粒含。  
しまりやや弱。炭化粒少含。

Pit7



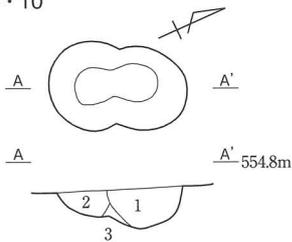
Pit7  
1 10YR2/2 黒褐 黄褐色土ブロック少含。しまりやや弱。  
炭化粒少含。  
2 10YR3/3 暗褐 夾雑物なし。しまり有。

Pit8



Pit8  
1 10YR2/2 黒褐 黄褐色土ブロック少含。  
しまりやや弱。炭化粒少含。  
2 10YR3/3 暗褐 夾雑物なし。しまり有。

Pit9・10

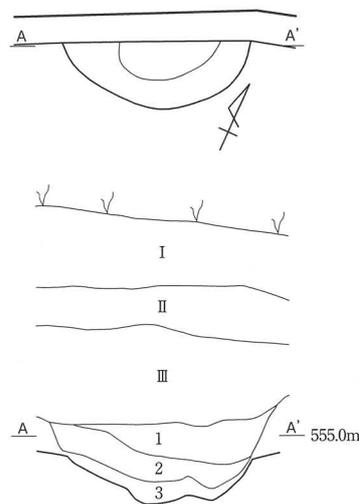


Pit9・10  
1 10YR2/1 黒 炭化粒少含。しまりやや弱。Pit10 覆土。  
2 10YR2/2 黒褐 黄褐色土粒少含。しまり有。Pit9 覆土。  
3 10YR3/2 黒褐 黄褐色土がまだらに混。掘り方か。

Pit7

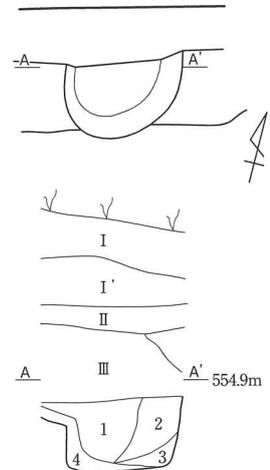
Pit7  
1 10YR2/2 黒褐 黄褐色土ブロック少含。しまりやや弱。  
炭化粒少含。  
2 10YR3/3 暗褐 夾雑物なし。しまり有。

Pit13



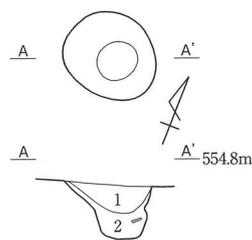
Pit13  
1 10YR2/2 黒褐 黄褐色土粒含。しまり弱。  
2 10YR2/2 黒褐 しまりやや弱。炭化粒少含。  
3 10YR3/3 暗褐 しまり有。黒褐色土少混。

Pit15

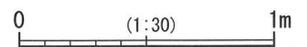


Pit15  
1 10YR3/3 暗褐 サビ微含。炭化粒少含。  
2 10YR3/2 黒褐 黄褐色土粒含。しまり弱。  
3 10YR3/3 暗褐 粘質。炭化粒少含。  
4 10YR4/4 黒 しまり有。粘質。ハードローム多含。

Pit11



Pit11  
1 10YR2/2 黒褐 黄褐色土粒少混。しまりやや弱。  
2 10YR3/3 暗褐 黄褐色土がまだらに混。しまりやや弱。遺物包含。



第8図 遺構図(ピット)

### 第3節 溝状遺構（SD1：第9図／第11図）

[規模] 東西方向の溝を確認した。確認範囲では長さ約7m、幅およそ1.2～1.6m、確認面からの深さは20cmを測ったが、調査区西側および遺構上部の大半は石積みと排水路に重複して壊されていた。調査区中央から東側にかけては、本遺構と既存水路の軸が若干異なったため攪乱による掘削が浅く、覆土および遺物の遺存状況は比較的良好であった。[出土遺物] 縄文土器〔21～24〕、弥生土器〔25〕平安時代の土師器〔26・27〕、近世陶器〔28～30〕、古銭〔31〕などが出土した。なお、縄文土器や弥生土器の出土もあったが、他地点の遺物と比べて表面の摩耗が著しいため、流れ込みによるものと思われる。

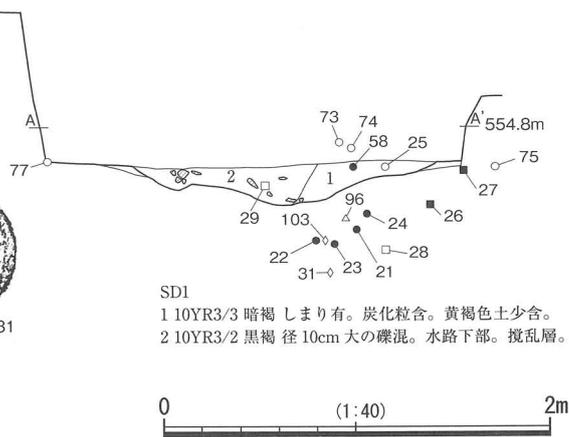
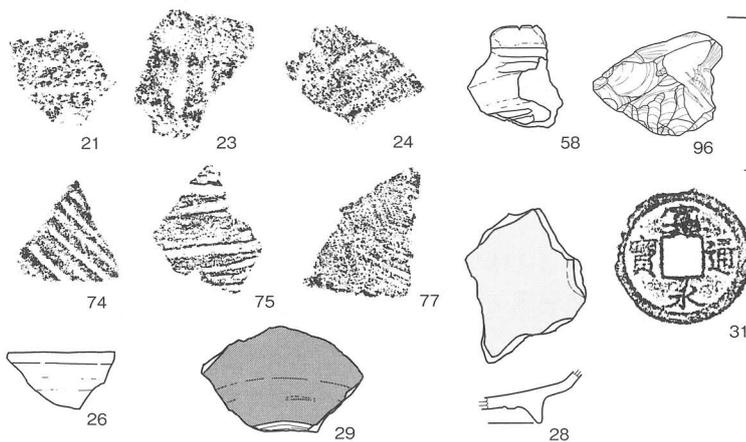
[特記] 遺構年代については甲斐型土器坏・羽釜片と近世陶器・寛永通宝の出土から、平安時代と近世以降の年代が推定される。本遺構は、東西方向に延びる溝状遺構で窪平と千野々宮の字境にあたるが、上部は既存の排水路と畑地境の石積みで壊され、明確ではない。

覆土の断面観察では、排水路設置に伴う攪乱以外に、平安時代の遺物が混在する黒褐色土層が確認できた。同層については、周辺での聴き取りから、今回の調査区がかつては「沢」と呼ばれる「水が流れていた場所」を埋め立てたことがわかり、その一部にあっていたものと考えられる。沢の方向についてはやや不明確であるが、この状況から遺構の性格を推定すると、水路として耕作地への利水や排水、または地境溝などの用途が考えられる。

年代については、出土遺物から古代と近世の別遺構が重複している可能性もあり、攪乱の影響や限られた範囲での調査だったため、判然としない。但し、今回の調査で出土した平安時代の遺物の多くが同遺構周辺と、その延長上に位置する試掘坑（TP4）で検出しており、またコンタに沿う方向で東西に伸びている状況から、地境として古代まで遡る人為的に造られた溝の可能性も考えられる。

第2表 遺構一覧

遺構名	調査区内 遺構位置	規模 (cm)			出土遺物 (掲載番号)	遺構推定年代	備考
		長径	短径	深さ			
Pit1	西側	48	34	43	15～17	縄文時代前期（諸磯c式古段階）か	
Pit2	西側	34	36	50	18・19	-	
Pit3	西側	38	-	13	-	-	
Pit4	西側	35	31	28	-	-	
(Pit5)	西側	-	-	-	-	-	欠番とした
Pit6	西側	28	25	19	-	-	
Pit7	中央	58	45	58	20	縄文時代前期（諸磯c式古段階）か	
Pit8	中央	58	57	46	小片のため未図化	-	
Pit9	中央	36	-	19	-	-	
Pit10	中央	32	-	23	小片のため未図化	-	
Pit11	中央	39	33	24	小片のため未図化	-	
(Pit12)	中央	-	-	-	-	-	欠番とした
Pit13	西側	74	-	19	-	-	
(Pit14)	中央	-	-	-	-	-	欠番とした
Pit15	東側	45	-	23	-	-	
Pit16	西側	33	-	20	-	-	
SK1	西側	110	110	92	1～4	縄文時代前期頃	
SK2	中央	114	108	27	小片のため未図化	-	
SK3	中央	120	111	69	5～11	弥生時代か	
SK4	西側	118	105	37	12～14	縄文時代前期（諸磯c式古段階）か	
SK5	西側	118	100	75	(サブトレイ括か)		
SD1	東側	-	-	-	21～31	平安時代（10世紀）～近世か	



第9図 遺構図(溝状遺構)

#### 第4節 出土遺物について

今回の調査では、縄文時代早期末から近世にかけての遺物が出土した。いずれも小片であるが、ここでは時代ごとに種類と型式、調整痕やその特徴、分布状況について述べておく。

##### 縄文時代

##### 早期末～前期初頭〔1・5・12・18・19・21・32・40・41～46〕

いずれも小片であるが、胎土に繊維を含む粗い胎土のもの〔1・5・18・21〕、鋸歯状の貝殻腹縁文がみられる押越式〔40〕、口縁部および断面三角形の隆帯にヘラ状工具で刻目を施した神之木台式〔41〕があげられる。この他、早期の遺物としては、折り返し状の口縁で条痕文とヘラ状工具による刻目が施され、補修孔が穿たれた〔32〕や、細かく浅い縄文がみられる〔19〕、前期初頭で東海系の中越式と思われる〔43〕などが出土した。土坑や溝から出土した遺物は、ほとんどが小片で覆土中に混在していたものであり、遺構外や遺構の掘り方面からの出土が主であった。調査状況から、調査区の大半が同段階の遺物が混在する再堆積層であったことが考えられる。また、早期末の土器とともに水晶片が伴出したことも、同地域・同時期の特徴の一つとしてあげられる。その他、無文であるが内外面に工具や指ナデがみられるもの〔44～45〕が出土した。これらは接合はしないが、胎土観察から同一個体と考えられる。なお、調整痕から平安時代末の土師器甕である可能性も考えたが、層序からこの段階の遺物と判断し、報告しておく。

##### 前期〔2～4・14～17・20・47～50・47～52〕

前期段階では、諸磯b新段階〔2・47～50〕、諸磯c古段階〔14～16・51・52〕の遺物が出土した。諸磯b新段階とした〔2・47～50〕は、縄文地文で半截竹管による平行沈線が施されている。諸磯c古段階とした〔14～16・51・52〕は、半截竹管による集合沈線文やボタン状貼付文が施されている。小片であったが、SK1、Pit1からの出土がみられた。

##### 中期〔6・7・22～24・34～37・55～62〕

中期では集合沈線文や結節縄文が施された五領ヶ台式〔22・33～36・54～58〕、角押文の貉沢式〔6・7・59〕、水煙把手の曾利式〔61〕、磨消縄文の加曾利E式〔62〕などが出土した。

五領ヶ台式については本調査現場においても、他の土器に比べて胎土に雲母を多く含むことが特徴として捉えられた。文様は口頸部文様帯に半截竹管による沈線で簡略した山形文がみられる〔33〕、粗い沈線文が施されている〔34・35・55〕などは、集合沈線文系列の崩れた段階と位置づけられる。その他、縄文地文に半截竹管による沈線がみられる〔22〕、結節縄文が施された〔33〕、縄文地文で半截竹管による刺突文と口縁部に刻目がつく〔56〕、三角形状工具による刺突から左右と下に沈線を施した〔57〕、沈線と隆帯が施された口縁部の突起〔58〕などがある。貉沢式は約2～3.5mmと幅狭の角押文がある〔6・7〕と、約7mm幅の角押文が施された〔59〕がある。遺構に伴って出土したものは少なかったが、周辺に遺構が存在する可能性は窺える。

##### 後・晩期〔63・64〕

縄文時代後期では、器厚が約7mmと薄く、縦の沈線がみられる63の1点を図化した。この時期の遺物は相対的にも微量であるが、周辺遺跡においては敷石住居跡が検出されていることから、調査区周辺でも遺構が存在する可能性を示すものと考えられる。また、縄文時代晩期もしくは弥生時代前期頃に比定する〔64〕は、波状の口縁部に縄文と内外面にミガキが施されている。

その他、縄文時代の遺物としては、小片で半面が剥離し、摩耗が著しい土製品〔65〕が出土した。胎土観察では縄文土器に類似しており、形状・用途については不明であるが、指頭による整形の痕がみられた。

##### 弥生時代〔8～11・25・38・66～79〕

今回出土した条痕文がみられる遺物は、すべて貝殻腹縁によるものではなく、櫛またはヘラ状の木製工具によるものであった。条痕文は外面だけでなく、内面にみられるもの〔38・71〕もあった。調査区全体に散在する状況であったが、SK3およびその周辺からは、ある程度まとまった出土が確認された。時期的には弥生時代中期頃に比定するものが多くみられた。その他、表面の磨耗が著しいが、東海東部・相模地域の系統とみられる〔66〕が出土した。

## 古墳時代〔80・81〕

S字状口縁台付甕と思われる薄手の土器片〔80・81〕の他、古墳時代前期頃の遺物が数点確認された。

## 平安時代〔26・27・39・82～91〕

同時代に比定する出土遺物のうち、最も古い段階に位置づけられるのが82で、外面をヘラ削り調整された坏または鉢の底部と思われる。83の皿は、内面に暗文、底部はヘラ削り調整されており、9世紀後半代に位置づけられる。その他、10世紀代の遺物として土師器坏〔26・84・85〕、甕〔87・88〕、羽釜〔27〕、竈形土器〔89〕、柱状高台〔86〕等出土した。26・84は坏の口縁部で、やや玉縁状になっており、84には灯明痕がみられた。85の坏は外面を回転ヘラ削り調整し、わずかに残る底部に糸切痕がみられた。

87・88は甕口縁部で、外面には指頭痕・指ナデと縦方向のハケメ、内面には横方向のハケメがみられる。27は羽釜の体部から剥がれた羽部分である。89は竈形土器の口縁部で、内面に折り返しと指頭痕・横方向のハケメ、外面はナデと縦方向のハケメ調整されており、内面は被熱により変色している。86は上部が欠損しており判別は難しいが、11世紀代に位置づけられる柱状高台の坏または皿と思われる。底部は回転糸切痕の他、多数の擦痕がみられ、何らかの転用の痕跡と考えられる。

主にSD1およびSD1攪乱部分（既存排水溝設置時の攪乱）、試掘トレンチ（TP4）から出土した。

## 中世〔90・91〕

調査区上層の耕作土から、無釉の播鉢〔90〕、土師質土器坏〔91〕が出土した。坏は、法量や体部が直線的に立ち上がる器形を呈している。県内における類似資料では、南アルプス市大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区出土の13世紀中頃～14世紀初頭に位置づけられるロクロ整形のものや、甲州市勝沼町岩崎氏館跡出土資料などが比較検討の対象にあげられる。しかし、本資料はこれらとも特徴を異にしており、1点のみが遺構外から単独で出土したため、年代的位置づけが困難である。この点についても、今後の検討課題としておきたい。

## 近世～近代〔28～31・92～95〕

小片のため、産地・年代等の特定は難しいが、陶器〔28～30・92～94〕、磁器〔95〕、と古銭〔95〕の出土を確認している。28は灰釉で高台内部のみ無釉であり、菊花皿状に口縁部が湾曲するものと思われる。29は内外面、97は口縁部とそれ以外で2種の釉薬が用いられている。30は外面のみ施釉されている。その他、天目茶碗片〔92〕や染付の一輪挿しで、蛸唐草が絵付された〔95〕などが出土している。

大半が表層の耕作土や攪乱中に混在したものであったが、SD1から陶器と古銭（寛永通宝）が出土しており、同遺構が近世においても畑地境、または字境とされていた可能性を示す資料といえる。

## 石器・石製品〔96～102〕

今回の調査では、明確に石器と判断できるものは少なく、黒曜石製のスクレイパー〔96〕と石鏃〔97〕が出土した。スクレイパーは、刃先が著しく摩耗しており、使用の痕跡として認められる。その他、水晶（石英）に加工痕がみられた〔98〕、石錐状の〔99〕、石斧の一部と思われる〔100〕、近世・近代のものと思われる砥石〔101〕や石筆〔102〕が出土した。このほか、今回の調査区からは水晶（石英）片8点が出土しており、図化はしなかったが写真（図版11）および観察表に掲載した。周辺には水晶の産地として、小瀬山南腹の水晶窟や透明度の高い乙女坂鉾山が知られており、今回出土した遺物についても非常に透明度が高く、針状包有物が確認されるものが含まれている。第5章で後述するが、本遺跡や同地域の特徴を示す資料といえる。

### 参考文献

小林達雄 編著 2008『総覧縄文土器』

小野正文 1986『釈迦堂Ⅰ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第17集 山梨県教育委員会

小野正文 1987『釈迦堂Ⅱ』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第21集 山梨県教育委員会

山梨県 1989『山梨県史』資料編1 原始・古代1 考古（遺跡）山梨県史編さん委員会

山梨県 1999『山梨県史』資料編2 原始・古代2 考古（遺構・遺物）山梨県史編さん委員会

高野玄明 1995「県道塩平～窪平線拡幅工事に先立つ牧丘町曲田遺跡調査報告」『研究紀要11』山梨県立考古博物館・山梨県埋蔵文化財センター

石神孝子 2009『山梨県内中性寺院分布調査報告書』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第260集 山梨県教育委員会

佐々木満 2004「山梨における中近世土器の様相」『山梨考古学論集V』山梨県考古学協会 25周年記念論文集 山梨県考古学協会

小林健二 1997『大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区』山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第132集 山梨県教育委員会

（第5章）

磯貝正義 1978「古代官牧制の研究」『郡司及び采女制度の研究』吉川弘文館

第3表 出土遺物観察表 (土器・陶磁器類)

図版 番号	地層 番号	出土位置	種類	器種	文様・調整痕	色調	胎土/含有物	法量 (cm)			注記	実測 番号	備考
								口径	底径	器高			
第10回	1	SK1	縄文土器	深鉢	内・外面ナデ	赤褐5YR4/6	粗/白・黒・赤色粒子 雲母 繊維	-	-	-	MヤクSK1	36	
第10回	2	SK1	縄文土器	深鉢	縄文地文 半載竹管による平行沈線 内面ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク75SK1	35	
第10回	3	SK1	縄文土器	深鉢	半載竹管による平行沈線 集合沈線文 内面ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク50SK1	34	
第10回	4	SK2	縄文土器	深鉢	半載竹管による平行沈線 集合沈線文 内面ナデ	外) にぶい黄褐10YR5/4 内) 褐7.5YR4/4	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクSK1	37	
第10回	5	SK3	縄文土器	深鉢	内・外面ナデ	外) 褐7.5YR4/3 にぶい赤褐5YR5/4	粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク51SK3	38	
第10回	6	SK3	縄文土器	深鉢	内・外面ナデ 角押文	褐7.5YR4/6	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク61SK3	40	
第10回	7	SK3	縄文土器	深鉢	内・外面ナデ 角押文	にぶい褐7.5YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク69SK3	43	
第10回	8	SK3	弥生土器	甕か	木製工具による条痕文 内面ナデ	明赤褐5YR5/6	やや粗/白・黒・赤色粒子	-	-	-	Mヤク53SK3	39	
第10回	9	SK3	弥生土器	深鉢か	木製工具による条痕文 内面ナデ	にぶい黄褐10YR6/4	密/白・黒・赤色粒子	-	-	-	Mヤク64SK3	41	
第10回	10	SK3	弥生土器	甕か	木製工具による条痕文 内面ナデ	橙5YR6/6	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク67SK3	42	
第10回	11	SK3	弥生土器	甕か	木製工具による条痕文 内面ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク70SK3	44	
第10回	12	SK4	縄文土器	深鉢	内・外面ナデ	橙7.5YR6/6	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク68SK4	47	
第10回	13	SK4	縄文土器	深鉢	内・外面ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク65SK4	46	
第10回	14	SK4	縄文土器	深鉢	半載竹管による平行沈線 半載竹管刺突文ボタン状貼付文 内面ナデ	明赤褐5YR5/6	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク44SK4	45	
第10回	15	Pit1	縄文土器	深鉢	半載竹管による平行沈線 半載竹管刺突文ボタン状貼付文 内面ナデ	外) にぶい赤褐5YR5/4 内) にぶい黄褐10YR5/3	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク33 Mヤク44SPit1 Mヤク2W	16 58 68	
第10回	16	Pit1	縄文土器	深鉢	半載竹管による平行沈線 棒状結節浮線文	にぶい赤褐5YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクPit1	59	
第10回	17	Pit1	縄文土器	深鉢	内外面に半載竹管による沈線	明褐7.5YR5/6	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクPit1	60	
第10回	18	Pit2	縄文土器	深鉢	押圧文か 内面ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	やや粗/白・黒色粒子 繊維	-	-	-	Mヤク46Pit2	61	
第10回	19	Pit2	縄文土器	深鉢	浅い縄文 内面ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク47Pit2	62	
第10回	20	Pit7	縄文土器	深鉢	内・外面ナデ 半載竹管による平行沈線	にぶい黄褐10YR5/4	密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク54Pit7	63	
第11回	21	SD1	縄文土器	深鉢	内・外面ナデ	明褐7.5YR5/6	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク20SD1	53	
第11回	22	SD1	縄文土器	深鉢	縄文地文 沈線 内面ナデ	明褐7.5YR5/6	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク14SD1	48	
第11回	23	SD1	縄文土器	深鉢	内・外面ナデ	褐7.5YR4/6	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク15SD1	49	摩耗著しい
第11回	24	SD1	縄文土器	深鉢	縄文か	明赤褐5YR5/6	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク19SD1	52	摩耗著しい
第11回	25	SD1	弥生土器	甕か	木製工具による条痕文	にぶい褐7.5YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク16SD1	50	
第11回	26	SD1	土師器	坏	内・外面ナデ	明赤褐5YR5/6	密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク21SD1	54	玉縁状口縁
第11回	27	SD1	土師器	羽釜	ナデ	褐7.5YR4/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク17SD1	51	鈿部
第11回	28	SD1	陶器	皿か	施釉 (高台内側無釉)	灰白2.5YR8/2 釉 灰白7.5Y7/1	緻密/白・黒・赤色粒子	-	-	-	Mヤク71SD1	56	体部に菊花皿状の湾曲有
第11回	29	SD1	陶器	碗か	施釉	灰黄褐2.5YR6/2 釉内) 灰白 釉外) 黒	密/白・黒色粒子	-	-	-	Mヤク56SD1	55	
第11回	30	SD1	陶器	鉢か	施釉	浅黄褐10YR8/3	密/白・黒色粒子 雲母	-	-	-	MヤクSD1	57	
第11回	32	調査区 西端	縄文土器	深鉢	内・外面条痕文 折り返し状口縁の上下に刻目	にぶい褐7.5YR5/4	密/白・黒色粒子	-	-	-	MヤクW	70	補修孔と思われる穿孔有
第11回	33	調査区 西端	縄文土器	深鉢	口唇部に刻目 口頸部文様帯に半載竹管文	にぶい赤褐5YR4/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母 石英	-	-	-	MヤクW	64	
第11回	34	調査区 西端	縄文土器	深鉢	半載竹管による平行沈線	にぶい黄褐10YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクW	65	
第11回	35	調査区 西端	縄文土器	深鉢	半載竹管による平行沈線	橙7.5YR6/6	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクW	66	
第11回	36	調査区 西端	縄文土器	深鉢	結節縄文	外) にぶい褐7.5YR5/4 内) にぶい赤褐5YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクW	71	
第11回	37	調査区 西端	弥生土器	深鉢	木製工具による条痕文	褐7.5YR4/6	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクW	67	
第11回	38	調査区 西端	弥生土器	甕か	内・外面木製工具による条痕文	外) にぶい褐7.5YR5/4 内) 明赤褐5YR5/6	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクW	69	
第12回	39	調査区 西端	土師器	坏	へら削り 底部へら削り	にぶい黄褐10YR5/4	緻密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクW	75	
第12回	40	表土	縄文土器	深鉢	内・外面ナデ 鐘歯状の貝殻産線文	にぶい赤褐5YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子	-	-	-	Mヤク表土T	94	
第12回	41	表土	縄文土器	深鉢	口縁と隆帯上に刻目 斜位の交互条線	にぶい褐7.5YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子	-	-	-	Mヤク表土T	93	
第12回	42	遺構外	縄文土器	深鉢	-	橙5YR6/6	密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク30	13	摩耗著しい
第12回	43	遺構外	縄文土器	深鉢	ナデ 内面条痕か	にぶい黄褐10YR6/4	やや密/白・黒・赤色粒子	-	-	-	MヤクK	76	
第12回	44	遺構外	縄文土器	深鉢	細ハケメ ナデ	外) 明赤褐5YR5/6 内) 灰黄褐10YR4/2	粗/白・黒・赤色粒子	-	-	-	Mヤク59	27	
第12回	45	遺構外	縄文土器	深鉢	ナデ	にぶい赤褐5YR4/4	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク49	25	
第12回	46	遺構外	縄文土器	深鉢	ナデ	褐7.5YR4/6	粗/白・黒色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク60	28	
第12回	47	遺構外	縄文土器	深鉢	縄文地文 半載竹管による平行沈線 内面ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク7	5	
第12回	48	遺構外	縄文土器	深鉢	縄文地文 半載竹管による平行沈線 内面ナデ	にぶい赤褐5YR5/4	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク41	22	
第12回	49	遺構外	縄文土器	深鉢	縄文地文 半載竹管による平行沈線 内面ナデ	明赤褐5YR5/6	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク58	26	
第12回	50	遺構外	縄文土器	深鉢	縄文地文 半載竹管による平行沈線 内面ナデ	褐7.5YR4/6	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク73	30	
第12回	51	遺構外	縄文土器	深鉢	半載竹管による平行沈線 半載竹管刺突文ボタン状貼付文 内面ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク31	14	
第12回	52	遺構外	縄文土器	深鉢	内・外面ナデ 底部木炭痕	外) 明赤褐2.5YR5/6 内) にぶい赤褐5YR5/4	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク26	11	
第12回	53	遺構外	縄文土器	深鉢	底部ミガキか	褐7.5YR4/3	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク62	29	底面平坦
第12回	54	遺構外	縄文土器	深鉢	半載竹管による平行沈線 内面ナデ	にぶい赤褐5YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク	72	
第12回	55	遺構外	縄文土器	深鉢	半載竹管による平行沈線 内面ナデ	外) にぶい黄褐7.5YR5/4 内) 明赤褐5YR5/6	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク32	15	
第12回	56	遺構外	縄文土器	深鉢	縄文地文 半載竹管による刺突 口唇部に刻目 内面ナデ	明赤褐5YR5/6	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク	73	
第12回	57	表土	縄文土器	深鉢	縄文 沈線 三角状工具による刺突 内面ナデ	明褐7.5YR5/6	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク表探	82	
第12回	58	遺構外	縄文土器	深鉢	内・外面ナデ 沈線 隆帯 突起部に半載竹管による刻み	にぶい褐7.5YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク38	19	
第12回	59	TP 3	縄文土器	深鉢	半載竹管による角押文 内面ナデ	明赤褐5YR5/6	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクT3	90	
第12回	60	遺構外	縄文土器	深鉢か	内・外面ナデ 沈線	明赤褐5YR5/6	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク5	3	

図版番号	掲載番号	出土位置	種類	器種	文様・調整痕	色調	胎土/含有物	法量 (cm)			注記	実測番号	備考
								口径	底径	器高			
第13回	61	TP1	縄文土器	深鉢	水煙把手 沈線 ナデ	明褐7.5YR5/6	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクT1	88	
第13回	62	遺構外	縄文土器	深鉢	磨消縄文 内面ナデ	橙7.5YR6/6	やや粗/白・黒・赤色粒子	-	-	-	Mヤク	74	
第13回	63	遺構外	縄文土器	深鉢	外面ナデ (ミガキカ) 沈線 内面ナデ	橙7.5YR6/6	やや粗/白・黒・赤色粒子	-	-	-	Mヤク42	23	縄文時代後期
第13回	64	TP1	縄文土器	深鉢	縄文 内・外面ナデ・ミガキ	にぶい褐7.5YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクT1	89	縄文時代晩期～弥生前期
第13回	65	攪乱内	縄文土器	深鉢	-	灰黄褐10YR4/2	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクK	77	指頭痕
第13回	66	遺構外	弥生土器	壺	縄文地文・沈線 木製工具による条痕文 内面ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク24	10	東海東部・相模地域系か 表面摩耗している
第13回	67	攪乱内	弥生土器	甕か	木製工具による条痕文 内面ナデ	にぶい黄褐10YR6/4	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクK	104	
第13回	68	遺構外	弥生土器	甕か	木製工具による条痕文 内面ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク6	4	
第13回	69	遺構外	弥生土器	甕か	木製工具による条痕文 内面ナデ	明赤褐5YR5/6	やや粗/白・黒・赤色粒子	-	-	-	Mヤク11	6	
第13回	70	遺構外	弥生土器	甕か	木製工具による条痕文 内面ナデ	にぶい褐7.5YR5/4	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク12	7	
第13回	71	遺構外	弥生土器	壺か	内・外面木製工具による条痕文 内面ナデ	外) にぶい黄褐10YR7/4 内) 褐色7.5YR6/6	やや密/白・黒色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク22	8	
第13回	72	遺構外	弥生土器	甕か	内・外面ミガキ	外) 明赤褐5YR5/6 内) 明赤褐2.5YR5/6	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク27	12	
第13回	73	遺構外	弥生土器	甕か	木製工具による条痕文 内面ナデ	外) にぶい黄褐10YR6/4 内) 明褐7.5YR5/6	やや粗/白・黒・赤色粒子 石英 雲母	-	-	-	Mヤク35	17	
第13回	74	遺構外	弥生土器	甕か	木製工具による条痕文 内面ナデ	にぶい黄橙10YR7/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク36	18	摩耗著しい
第13回	75	遺構外	弥生土器	甕か	木製工具による条痕文 内面ナデ	にぶい黄褐10YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク39	20	
第13回	76	遺構外	弥生土器	壺か	木製工具による条痕文 内面ナデ	明褐7.5YR5/6	やや粗/白・黒・赤色粒子 石英 雲母	-	-	-	Mヤク40	21	
第13回	77	遺構外	弥生土器	壺か	木製工具による条痕文 内面ナデ	にぶい黄褐10YR5/4	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク78	32	
第13回	78	表土	弥生土器	甕か	木製工具による条痕文 内面ナデ	にぶい黄褐10YR5/4	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク表土	83	
第13回	79	遺構外	弥生土器	甕か	木製工具による条痕文 内面ナデ	外) にぶい黄褐10YR5/4 内) 褐7.5YR4/6	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク1	1	
第14回	80	遺構外	土師器	S字甕か	ハケメ (縦位) 内面ナデ・指頭痕	にぶい黄褐10YR5/4	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク48	24	
第14回	81	試掘一括	土師器	S字甕か	ハケメ (縦位) 内面ハケメ (横位)	-	-	-	-	-	MヤクT	103	
第14回	82	遺構外	土師器	坏か	内面ナデ 外面・底部へう削り	橙5YR6/6	緻密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	(7.0)	-	Mヤク4	2	
第14回	83	遺構外	土師器	皿	内面ナデ・暗文 外面・底部へう削り	明赤褐5YR5/6	密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク74	31	
第14回	84	攪乱内	土師器	坏	内・外面ナデ	橙5YR6/6	密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクK	95	灯明ス付置
第14回	85	TP4	土師器	坏	へう削り	にぶい橙7.5YR6/4	密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクT4	91	
第14回	86	攪乱内	土師器	柱状高台	ナデ 底部回転糸切痕	明赤褐5YR5/6	やや密/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクK	78	
第14回	87	攪乱内	土師器	甕	ハケメ ナデ	褐7.5YR4/4	やや粗/白・黒・赤色粒子 雲母	-	-	-	MヤクK	79	
第14回	88	TP4	土師器	甕	ナデ ハケメ	にぶい赤褐5YR4/4	やや粗/白・黒・赤色粒子	-	-	-	MヤクT4	92	
第14回	89	遺構外	土師器	電形土器	ハケメ ナデ 内面指頭痕	にぶい褐7.5YR5/4	やや粗/白・黒色粒子 雲母	-	-	-	Mヤク23	9	内面被熱により黒色化
第14回	90	表土	陶器	播鉢	内・外面ナデ 内面 播り目	にぶい黄橙10YR7/3	密/白・黒・赤色粒子	-	-	-	Mヤク表土	84	
第14回	91	遺構外	土師質土器	坏	ナデ 底部回転糸切痕	橙5YR6/6	密/白・黒・赤色粒子 雲母	(11.0)	(7.0)	(2.5)	Mヤク79	33	
第14回	92	攪乱内	陶器	天目茶碗	施軸 へう削り 高台部無軸	灰白2.5YR7/1	緻密/黒・赤色粒子	-	-	-	MヤクK	80	
第14回	93	表土	陶器	碗	施軸	灰黄	緻密/白・黒色粒子	-	-	-	Mヤク表土	86	
第14回	94	表土	陶器	壺か	施軸	浅黄2.5Y7/3	緻密/黒色粒子	-	-	-	Mヤク表土	85	
第14回	95	攪乱内	磁器	一輪挿	染付 胡唐草	灰白2.5YR8/1	緻密	-	-	-	MヤクK	81	

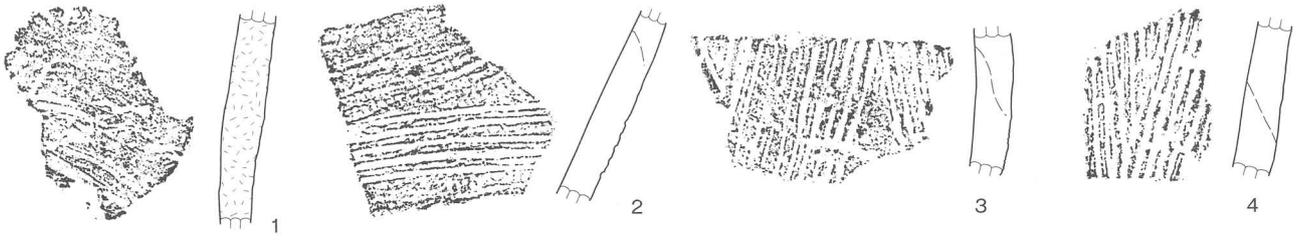
第4表 出土遺物観察表 (石器・石製品類)

図版番号	掲載番号	出土位置	材質	種別	法量 (cm)			重さ (g)	注記	実測番号	備考
					縦	横	厚み				
第15回	96	SD1	黒曜石	スクレイパー	2.78	3.55	0.98	9.57	Mヤク13SD1	99	使用痕 (刃部摩耗)
第15回	97	SK4	黒曜石	石鏃	1.69	0.91	0.20	0.32	Mヤク55	100	
第15回	98	遺構外	石英 (水晶)	-	2.13	2.18	0.68	3.97	Mヤク66	102	
第15回	99	遺構外	石英 (水晶)	-	2.95	1.65	0.71	3.44	Mヤク63	101	針状包有物
第15回	100	遺構外	粘板岩	打斧か	7.52	6.26	1.55	103.46	MヤクK	98	破片
第15回	101	遺構外	変質凝灰岩	砥石	3.77	2.40	0.99	14.20	Mヤク13	96	
第15回	102	遺構外	滑石片岩	石筆か	4.11	0.85	0.75	6.07	MヤクK	97	
写真掲載	写1	一括	石英 (水晶)	-	-	-	-	5.36	Mヤク一括	-	
写真掲載	写2	試掘	石英 (水晶)	-	-	-	-	3.00	薬師堂試掘	-	
写真掲載	写3	調査区西端	石英 (水晶)	-	-	-	-	6.55	MヤクW	-	
写真掲載	写4	攪乱内	石英	-	-	-	-	4.17	MヤクK	-	
写真掲載	写5	攪乱内	石英 (水晶)	-	-	-	-	23.65	MヤクK	-	
写真掲載	写6	一括	石英 (水晶)	-	-	-	-	34.50	Mヤク34	-	
写真掲載	写7	攪乱内	石英 (水晶)	-	-	-	-	6.75	MヤクK	-	
写真掲載	写8	攪乱内	石英 (水晶)	-	-	-	-	10.67	MヤクK	-	

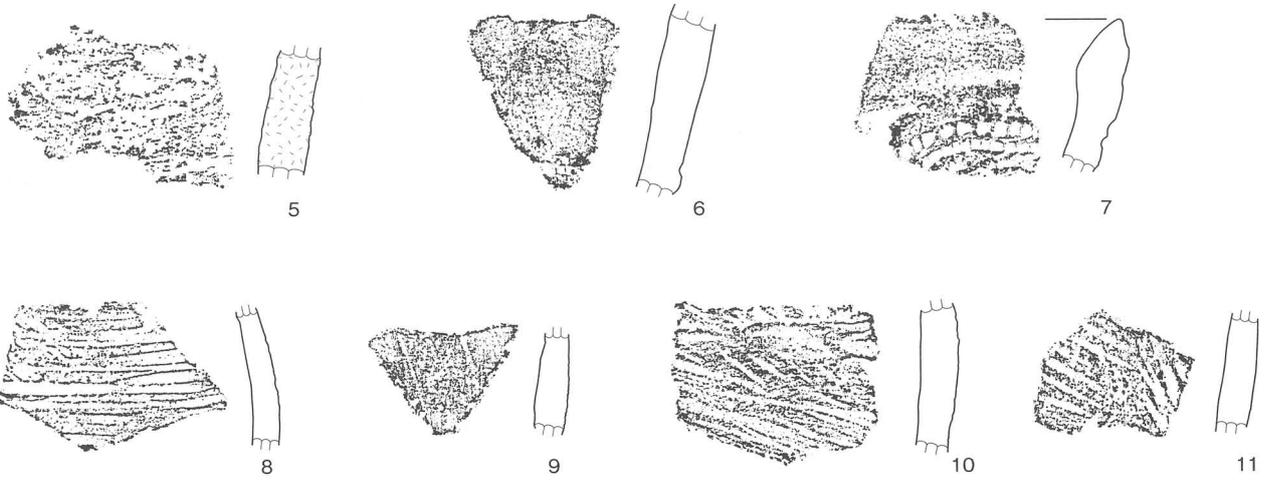
第5表 出土遺物観察表 (古銭)

図版番号	掲載番号	出土位置	種類/材質	種別	法量 (cm)			重さ (g)	注記	実測番号	備考
					縦	横	厚み				
第11回	31	SD1	古銭/銅	寛永通宝	2.18	2.25	0.85	1.35	Mヤク72SD1	87	

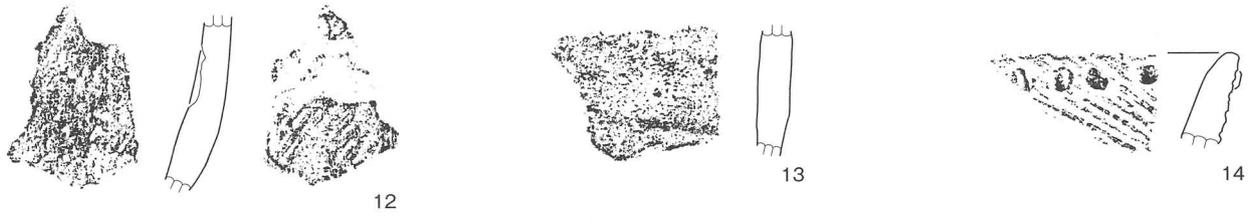
SK 1



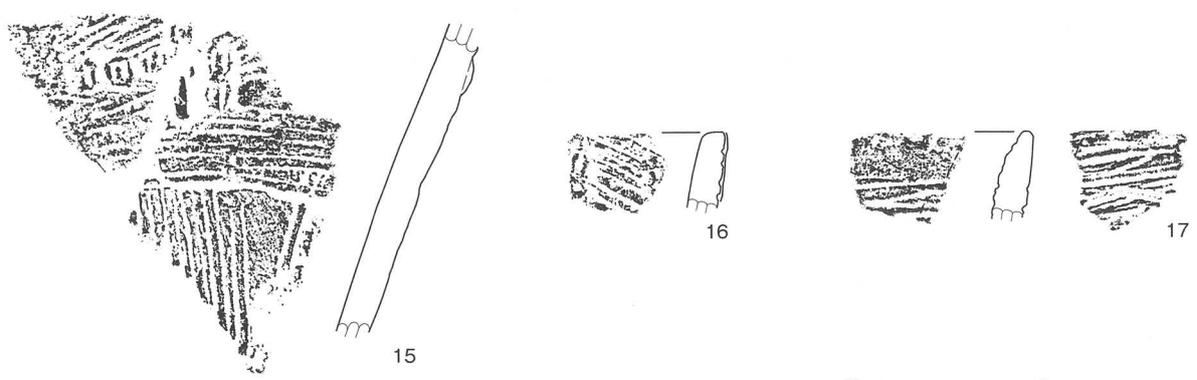
SK 3



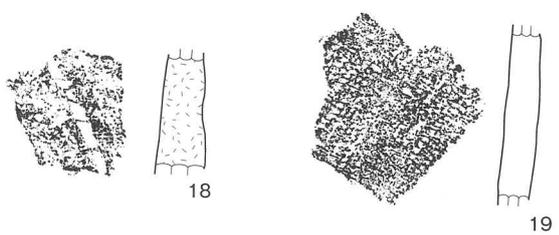
SK 4



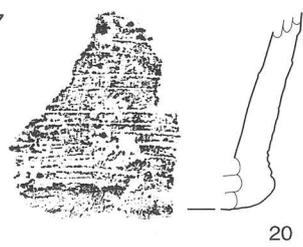
Pit 1



Pit 2

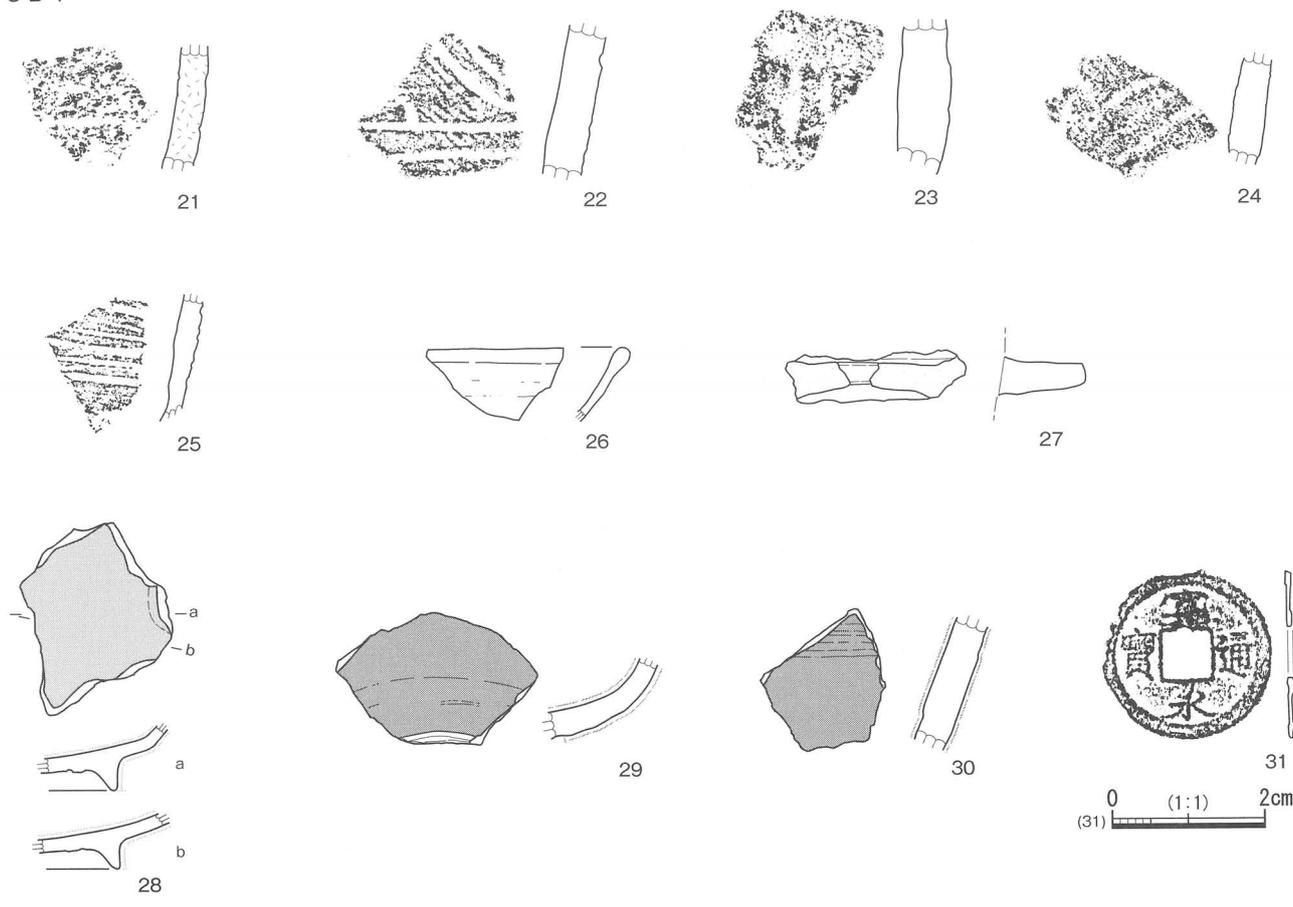


Pit 7

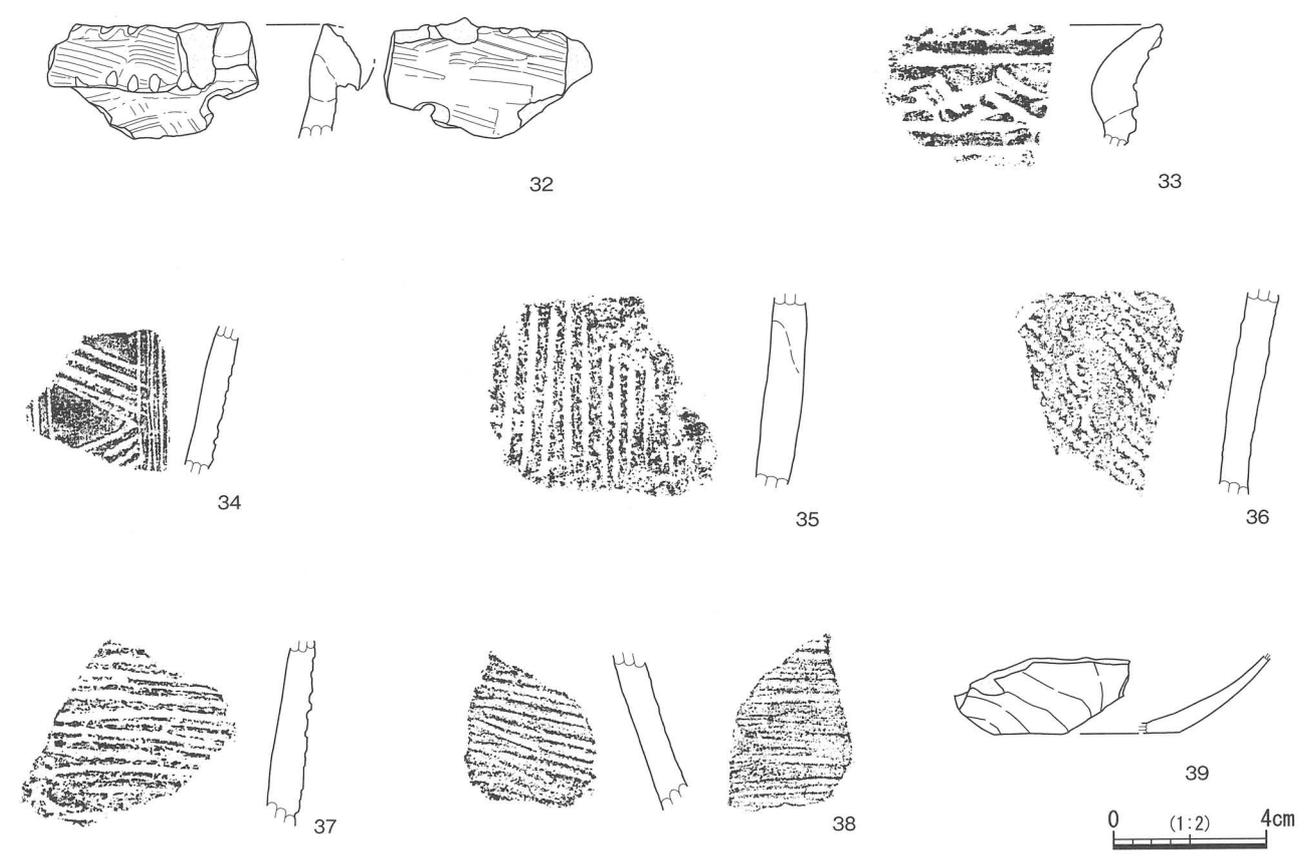


第 10 図 出土遺物 (SK1・3・4、Pit1・2・7)

SD1



調査区西端トレンチ内一括



第11図 出土遺物 (SD1、調査区西端)

遺構外および試掘調査出土



第12図 出土遺物（遺構外・試掘1）



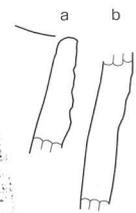
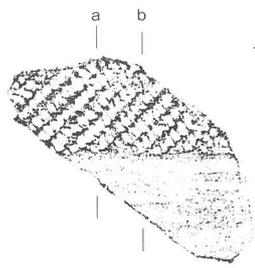
61  
TP1



62



63



64  
TP1



65  
攪乱内



66



67  
攪乱内



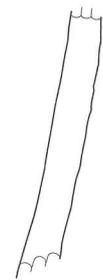
68



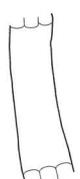
69



70



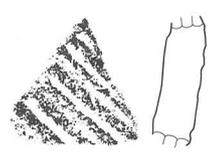
71



72



73



74



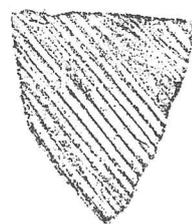
75



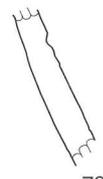
76



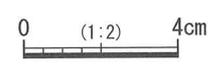
77



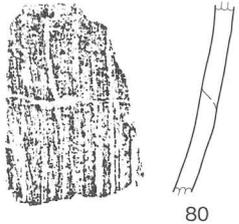
78  
表土



79



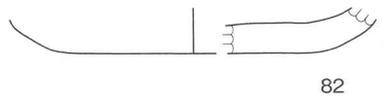
第 13 図 出土遺物 (遺構外・試掘 2)



80



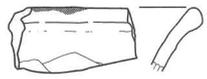
81  
試掘一括



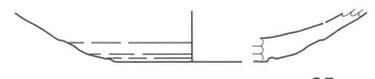
82



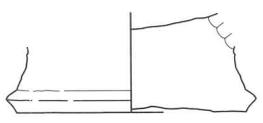
83



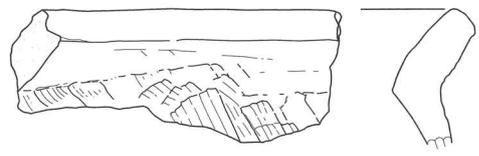
84  
攪乱内



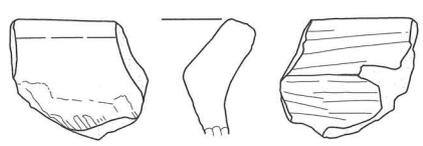
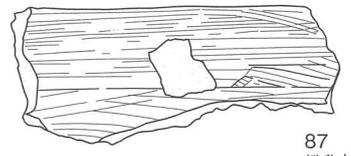
85  
TP4



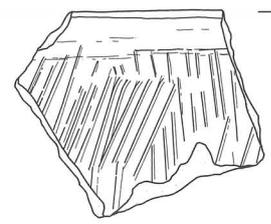
86  
攪乱内



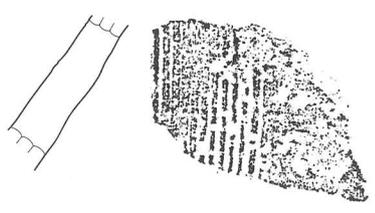
87  
攪乱内



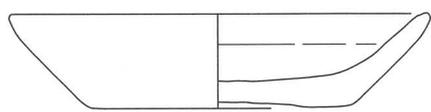
88  
TP4



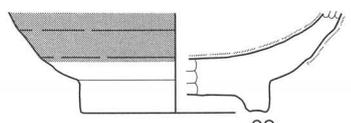
89



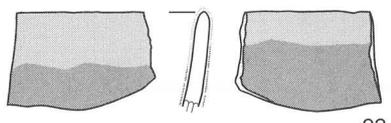
90  
表土



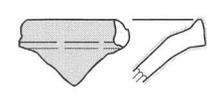
91



92  
攪乱内



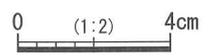
93  
表土



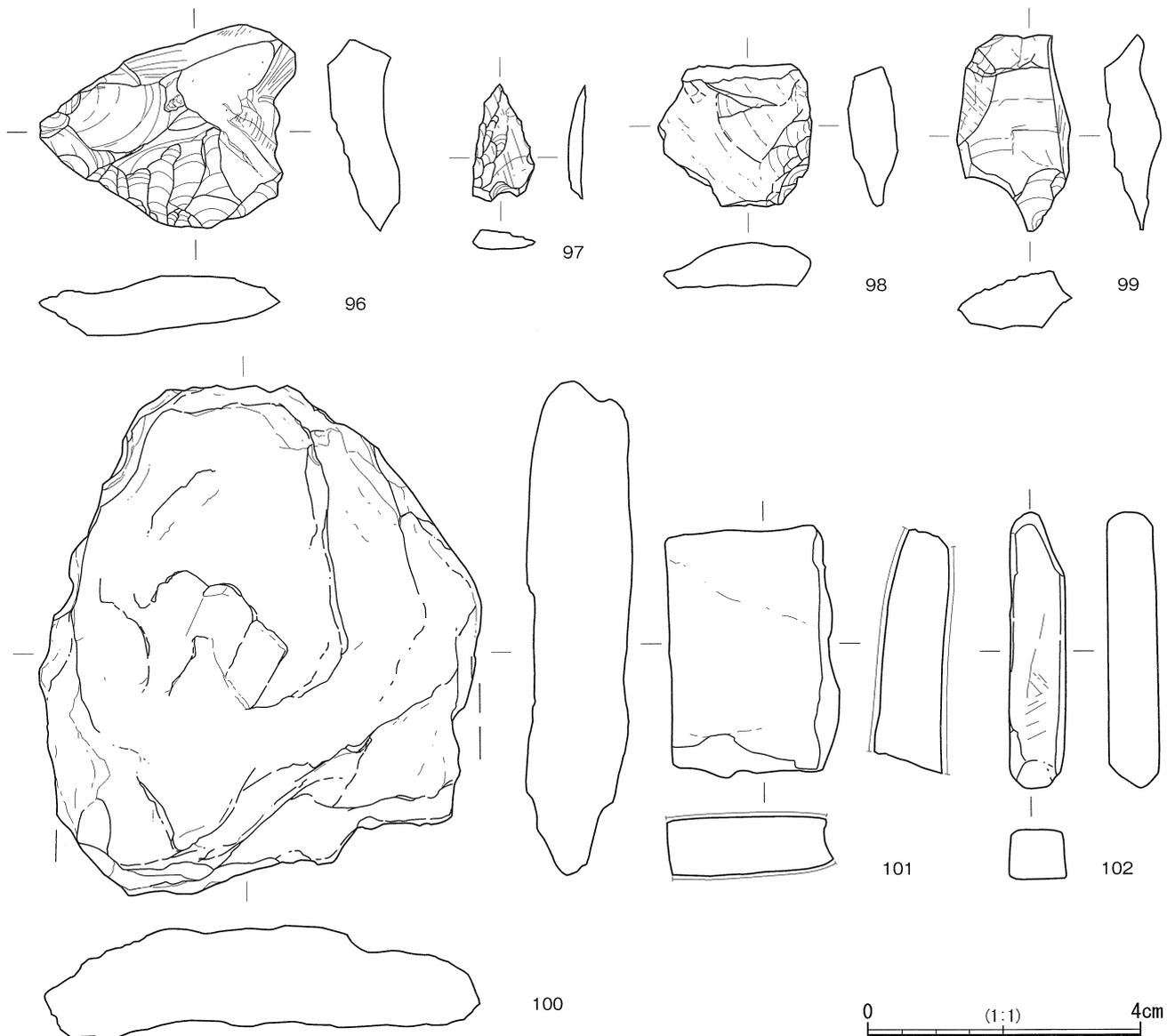
94  
表土



95  
攪乱内



第 14 図 出土遺物 (遺構外・試掘 3)



第15図 出土遺物（石器・石製品）

## 第5章 総括

### 第1節 検出した遺構・遺物について

今回の調査成果は、縄文時代・平安時代の遺跡と周知されてきた本遺跡において、縄文時代の遺構とともに、弥生時代の遺構の存在が明らかになったこと、また平安時代の遺物が出土した東西方向に延びる溝状遺構（SD1）を検出したことがあげられ、地域の歴史を解明していく上で貴重な資料が得られたといえる。

土坑については検出した5基のうち、SK1・3・5は深さ70cmを超えた。遺構年代については、SK1は縄文時代、SK3については覆土および遺構周辺から遺物が確認されたことから、弥生時代の遺構と位置づけた。しかし調査時の所見では、縄文時代・弥生時代の遺構覆土は包含する遺物以外、ほとんど差は認められなかった。遺構の埋没状況はほぼ一定で、重複していたSK2・3は覆土の断面観察でも重複関係が不鮮明で新旧の断定はできなかった。SD1については断面観察や遺物出土状況および聞き取りによる情報から検討し、水路や地境の用途を推定した。限られた範囲と攪乱の影響があって明確な軸方向は見出せなかったが、遺物の出土状況などから遺構がほぼ同じ位置に造られ、または掘り直しが行われた可能性を推定した。

以下、今回の調査成果を踏まえ、第2・3節で今後の課題について取上げておきたい。

## 第2節 縄文時代早期末の遺物に伴う水晶片について

今回、限られた調査区のなかで際立ったのは、縄文時代早期の土器片を包含する層から、水晶（石英）片が多数出土したことである。第4章でも触れたが、県内では縄文時代早期の土器と水晶の出土が確認された事例が多数あり、本遺跡周辺では、牧丘町倉科の奥豊原遺跡、甲府市上黒平の宮ノ前遺跡、下黒平の判平遺跡のほか、水晶石器加工跡とする遺構を検出した甲州市竹森の乙木田遺跡などが知られている。

なかでも本遺跡と近い奥豊原遺跡の位置づけについて、発掘調査を実施した山梨学院大学・十菱駿武氏は、出土した水晶の透明度から原産地を乙女坂と推定し、柳平・焼山峠・小檜山の尾根筋を経て、甲府盆地周辺の集落へ水晶や他の資材を供給した水晶加工・中継集落と推定されている。一方、甲府盆地を挟んだ釈迦堂遺跡においても、縄文時代早期～前期には住居跡出土フレイクの重量比から「水晶の使用頻度が他の時期に比べて著しく高い」と報告書に記載されている。

今回の調査で検出した水晶および縄文時代早期末の土器片については、再堆積層中から出土したもので、明確な遺構は検出されなかった。しかし県内事例からみても、同時期に水晶が利用される傾向があったことは確かといえる。本遺跡周辺もその傾向に沿った事例のひとつになろう。水晶の流通に関しては産地同定が非常に困難で経路や形態についてなど、検討課題は山積している。今後の調査成果を待ち、同地域の性格が解明されていくことを期待したい。

## 第3節 牧荘についての若干の考察

前述の通り、牧荘は少なくとも12世紀後半には成立し、安田義定以降、拠点や要衝地とされてきたことがわかる。しかし同地域においては、地名の由来とされる牧自体に関する遺構・遺物はこれまで確認されておらず、その実は明確になっていない。同荘に関連する牧についての文献では、『吾妻鏡』第十四巻建久五（1194）年三月十三日条に「甲戌甲斐国武河御牧駒八疋参着」がある。これについて『甲斐国志』卷之二国法之部では、「武河ハ今竹川ニ作ル山梨郡牧之庄ニ在リ西保・中摩木ト馬城ヲ分ツ牧平・竹川ハ西保ノ内ナリ」と見え、同荘の西保に牧があったとしている。牧は11世紀以降、次第に開発耕地化されて荘園化していくとされるが、上記によれば同荘では12世紀後半においても馬に関わる施設の存在が示されることになる。

武河牧については、卷之三十八古跡部第一で「東鑑ニ武河ト書タル故ニ巨麻郡ノ武河ニ混ジリタリ」と巨摩郡の武川ではなく、同訓の西保にある竹川との混同で「牧ノ荘ノ内一般ノ馬城ト見エタリ」とある。この「一般の牧」が表すのが、当時の状況を示しているのか、羅漢寺の坐像底銘にある「御牧庄」について古代の官牧との関連性を否定する意味であるのかは不明である。また馬城については、『甲斐国志』は大村直に関する記述においても、「馬城ヲ三段ニ分ケテ」とあり、同荘内には少なくとも中牧・西保の2箇所に分画された牧施設の存在が推定される。そこで、今回の調査地を中牧にあった施設の一面と推定し、次の点を述べておく。

報告の通り、SD1は千野々宮と窪平の地境に沿ったかたちで東西へ延びていたと推定し、年代は9C末～10C前半頃まで遡る可能性がある。これに関連して注目されるのが、市教委が調査した本調査区西側の隣接地で検出された平安時代の竪穴住居跡から、「門」・「糸<sub>カ</sub>」・「継<sub>カ</sub>」と墨書された9～10C代の土師器坏（図版11）が出土したことである。まだ未報告の資料のため検討が足りず、推定の域をでないが、この「門」が文字通り区画施設の出入口を示すとすれば、SD1は施設の区画を成していた溝の一部の可能性はある。なお、この地境は袖口方面から南北に細長く、西は段丘面、東は河岸傾斜面の琴川河岸段丘の端部に近い場所にあり、これより下ると両端ともに緩やかに広がる地形となっている。以上の点から、甲斐国志にみられる「馬城」の呼び名に相応する施設が、本調査区から北側に存在していた可能性を指摘しておきたい。おわりに 今回の調査は、わずか約51㎡という狭小な調査であったが、この地域の特色ある生活の痕跡を確認することができた。課題として取上げた点についてはご叱正を頂戴し、今後の調査研究の契機としてさらに検討を重ねていくことにしたい。本書が今後の調査研究および地域教育の一助となれば幸いである。

本調査を実施するにあたっては、山梨県峡東農務事務所並びに山梨市教育委員会、発掘調査および整理報告業務に従事して頂いたスタッフ、その他関係者の皆様には多大なる御理解と御協力を頂戴しました。末筆となりましたが、記して心より御礼申し上げます。



調査地点から（北東方面）



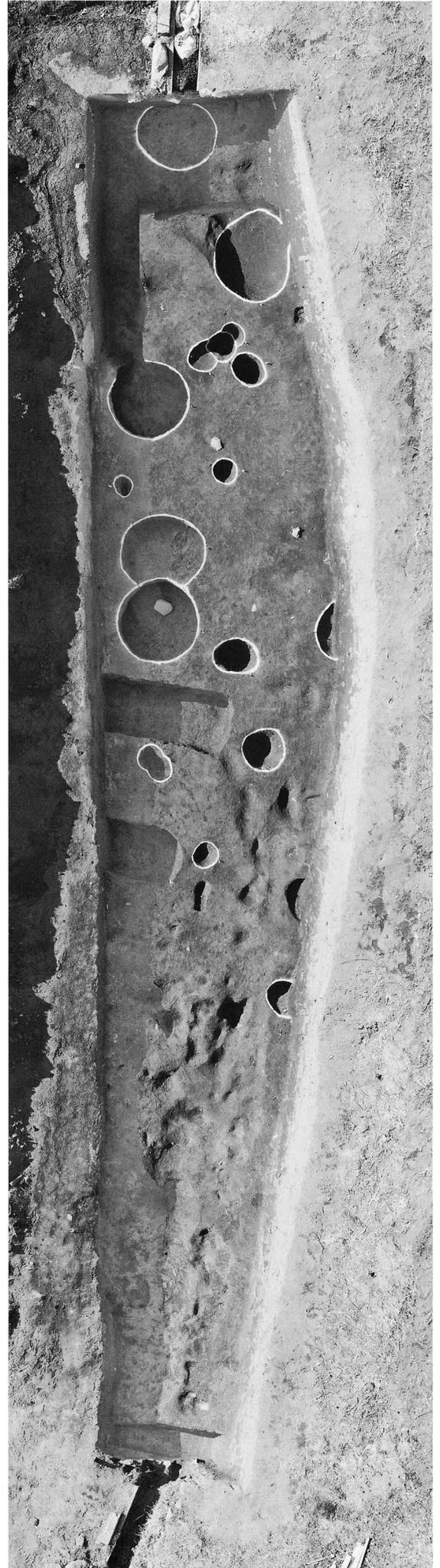
調査地点から（東方面）



調査地点から（南東方面）



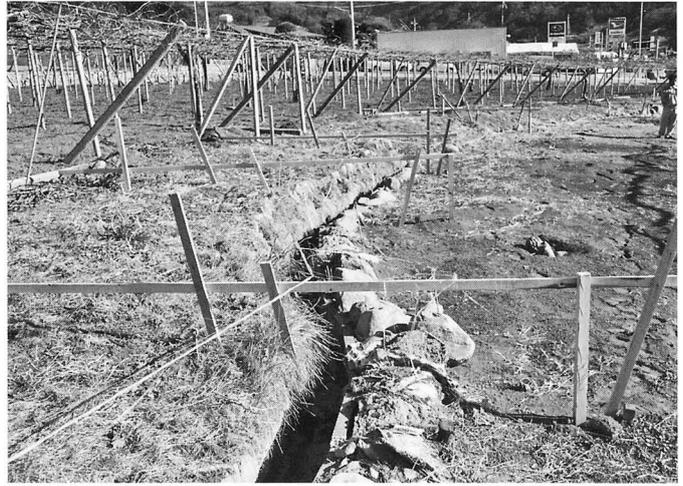
調査地点から（南方面）



調査区全景



調査前（東から）



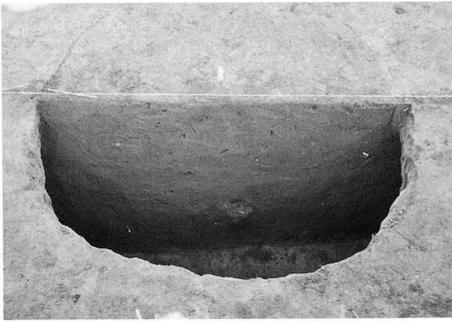
調査前（西から）



完掘後（東から）



完掘後（西から）



SK1 半截状況



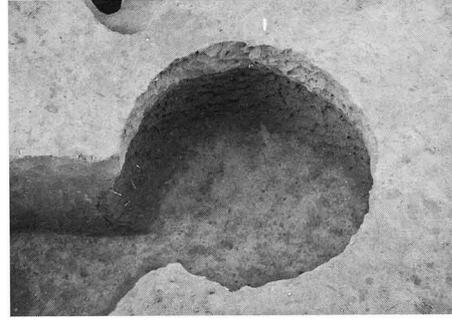
SK1 半截状況



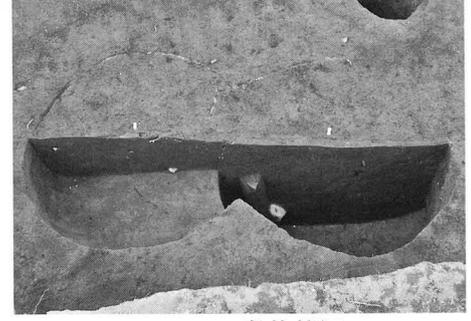
SK1 半截状況



SK1 完掘状況



SK1 完掘状況



SK2・3 半截状況



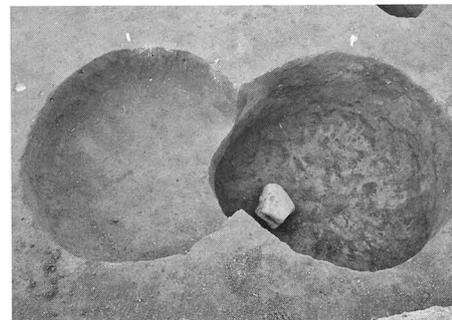
SK2・3 遺物出土状況



SK2・3 遺物出土状況



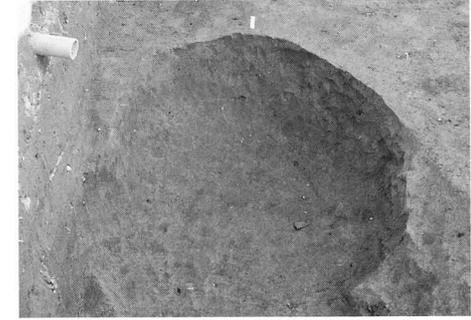
SK2・3 完掘状況



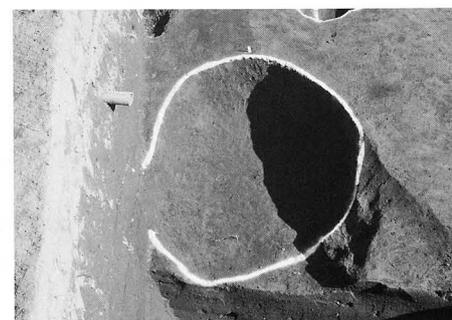
SK2・3 完掘状況



SK4 半截状況



SK4 完掘状況



SK4 完掘状況



SK5 完掘状況



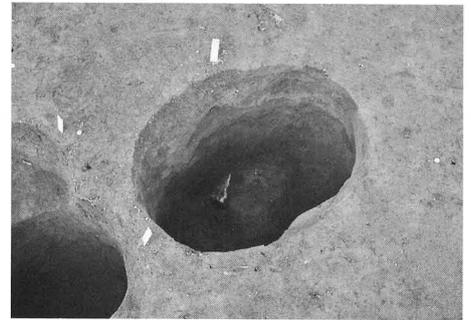
SK5 完掘状況



SK5 完掘状況



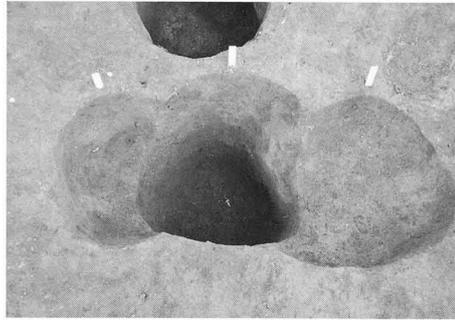
Pit1 半截状況



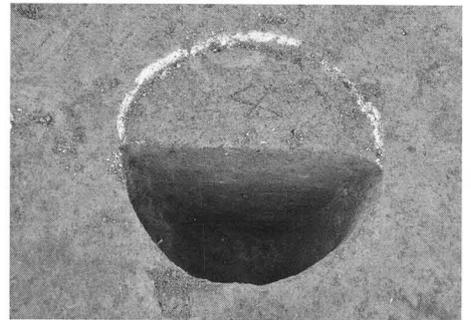
Pit1 完掘



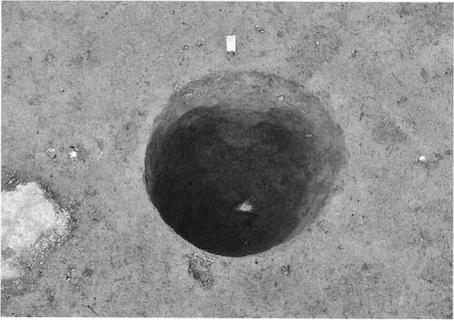
Pit 2・3・16 半截状況



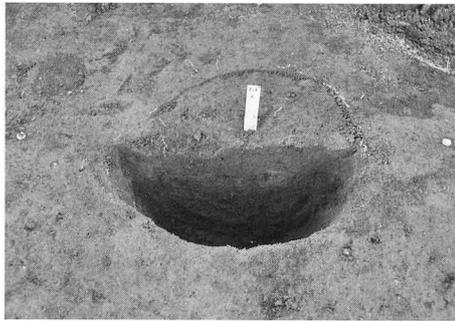
Pit 2・3・16 完掘



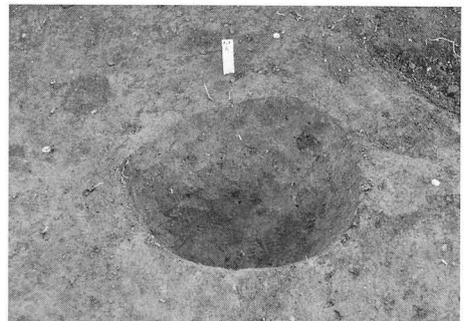
Pit4 半截状況



Pit4 完掘



Pit6 半截状況



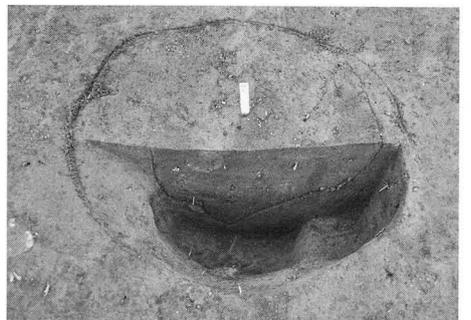
Pit6 完掘



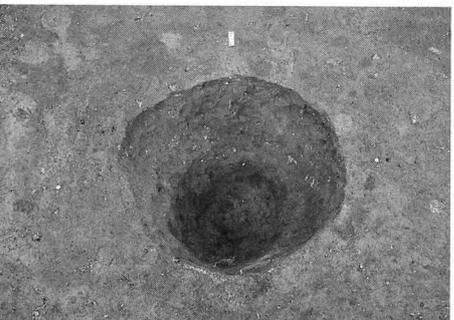
Pit7 半截状況



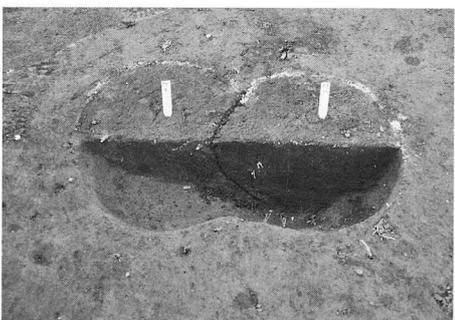
Pit7 完掘



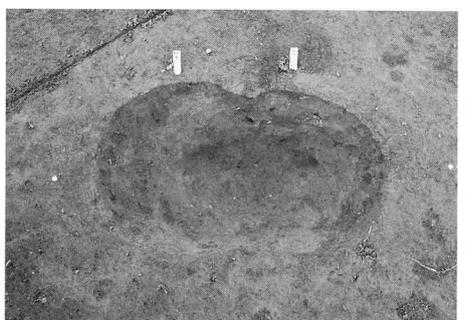
Pit8 半截状況



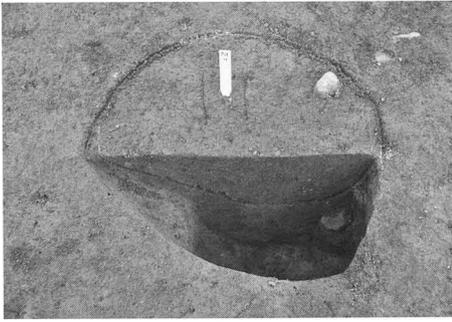
Pit8 完掘



Pit9・10 半截状況



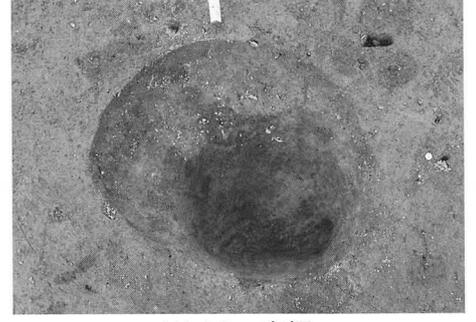
Pit9・10 完掘



Pit11 半截状況



Pit11 断面セクション



Pit11 完掘



Pit13



Pit15



SD1 断面セクション



SD1 セクションベルト



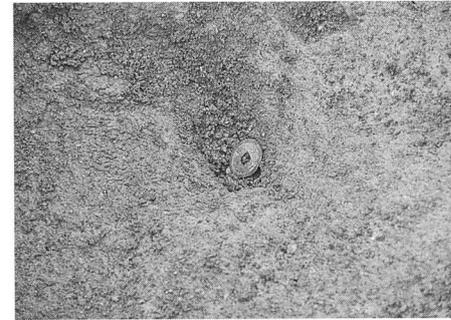
SD1 全景



SD1 完掘状況



SD1 遺物出土状況



SD1 出土 古銭 [31]



SD1 出土 陶器 [28]



SD1 出土 石器 [96]



遺物出土状況 [91]



調査風景



調査風景



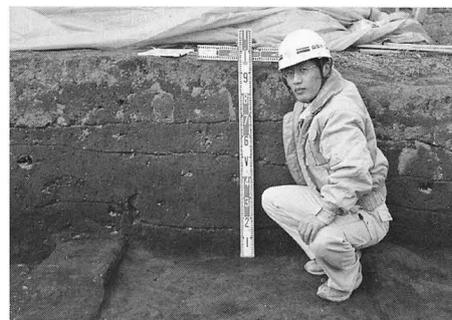
調査風景



調査風景〔測量〕



調査風景〔測量委託〕



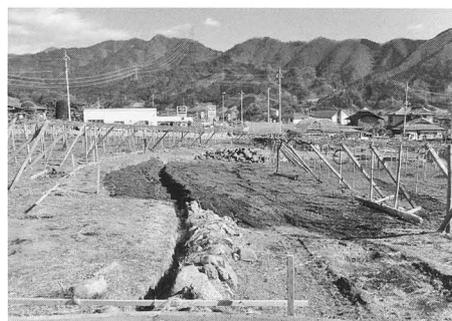
現場確認風景



現場確認風景



埋め戻し状況



埋め戻し後状況



御堂（精進家屋敷神）



薬師如来像（木造）



中牧神社境内

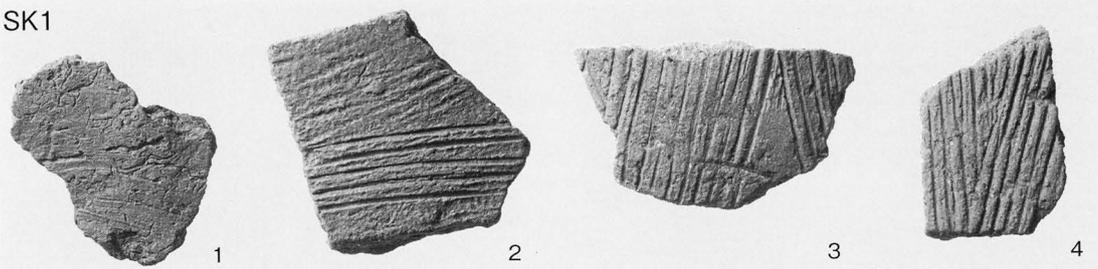


御堂脇・六地藏石幢



中牧神社本殿

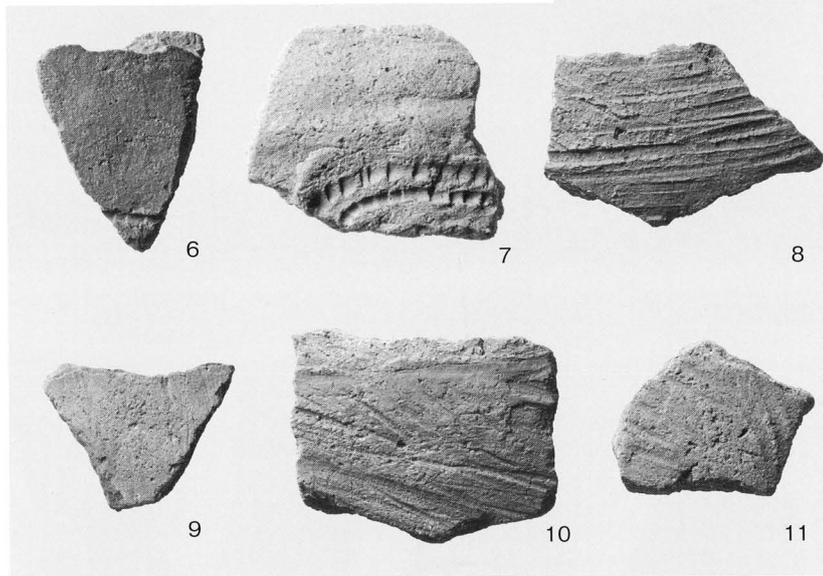
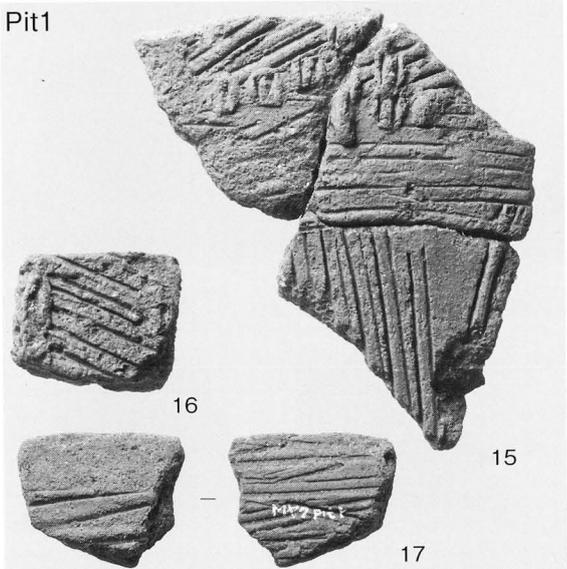
SK1



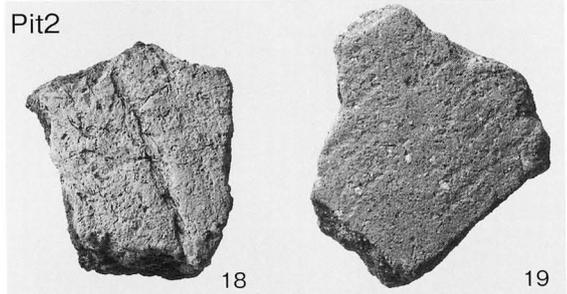
SK3



Pit1



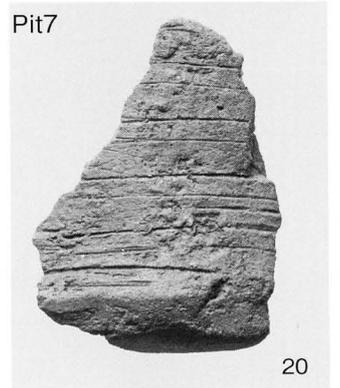
Pit2



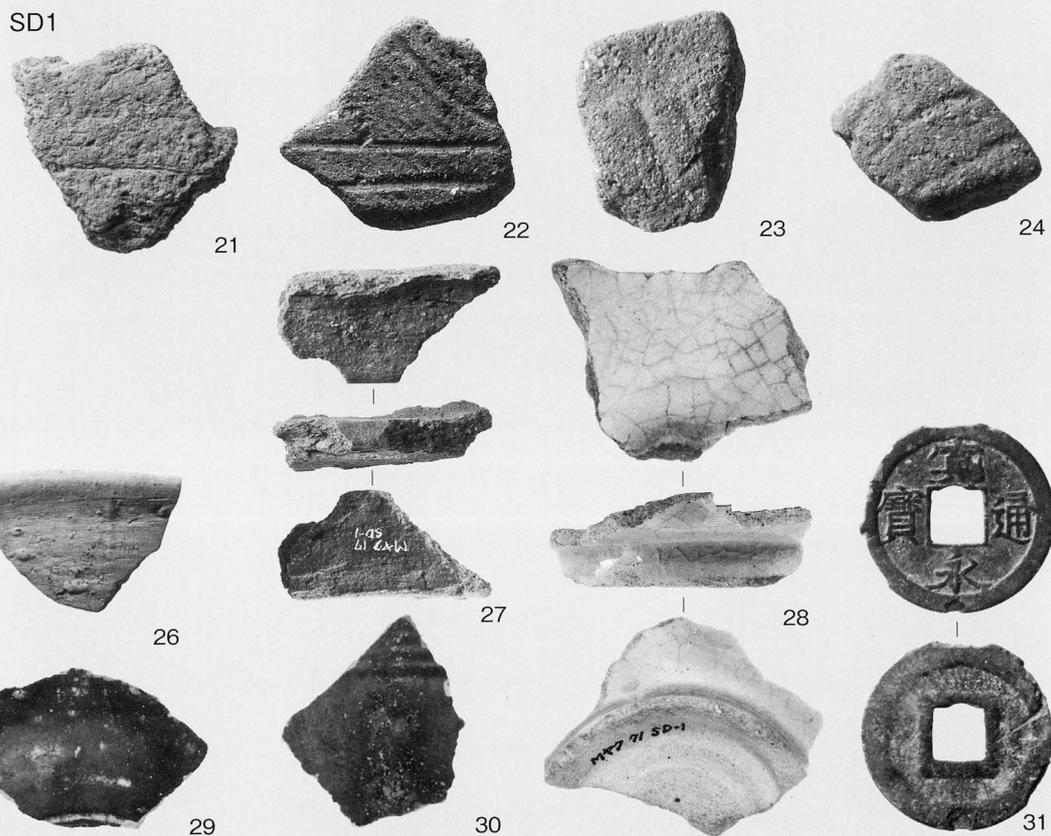
SK4



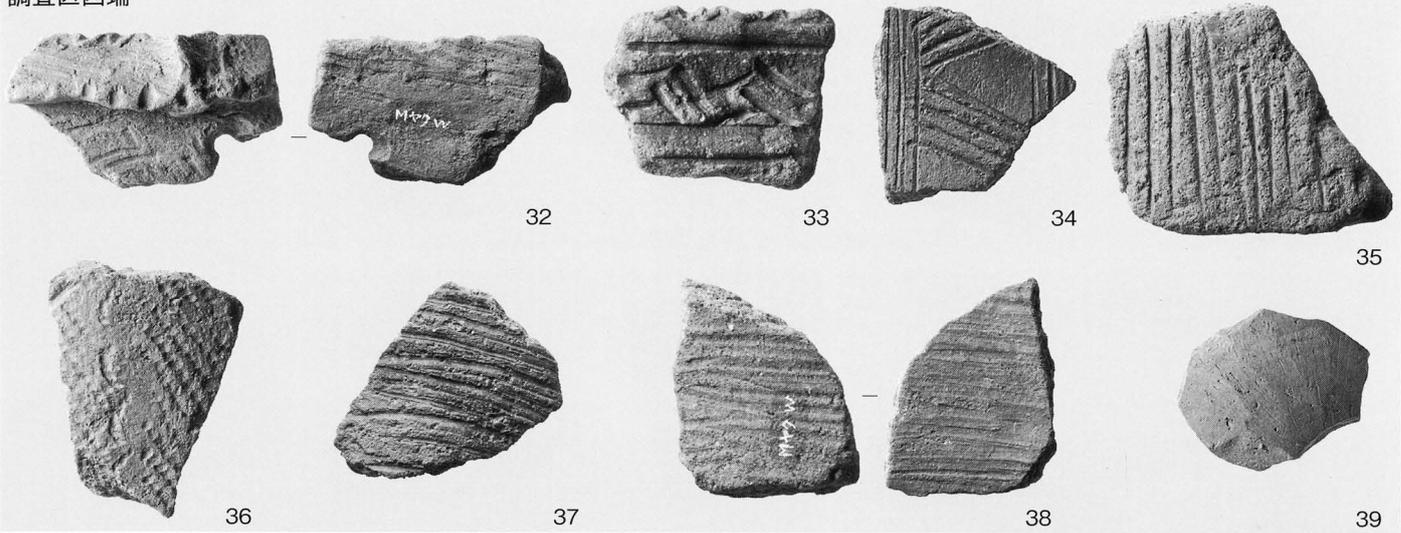
Pit7



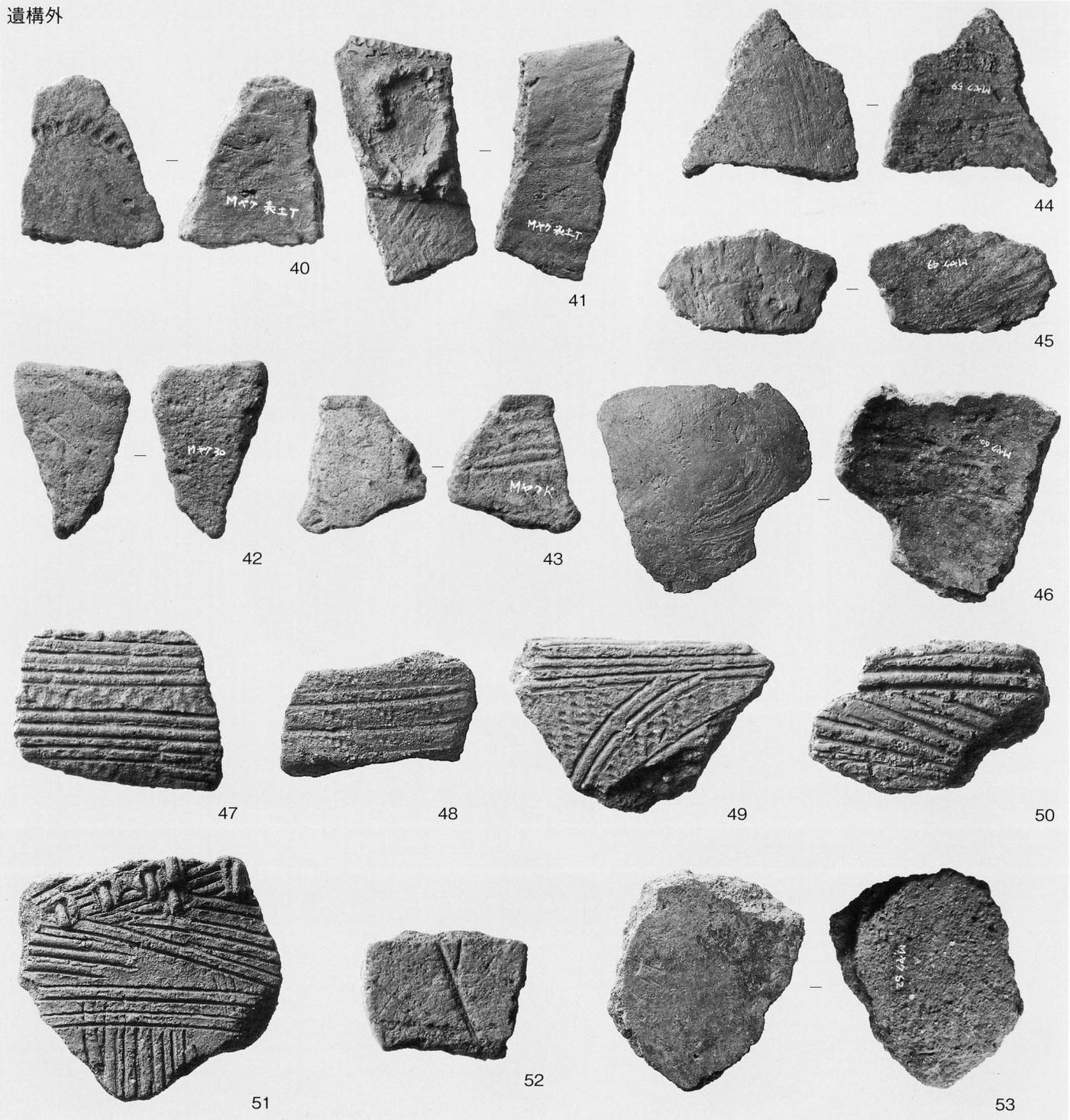
SD1

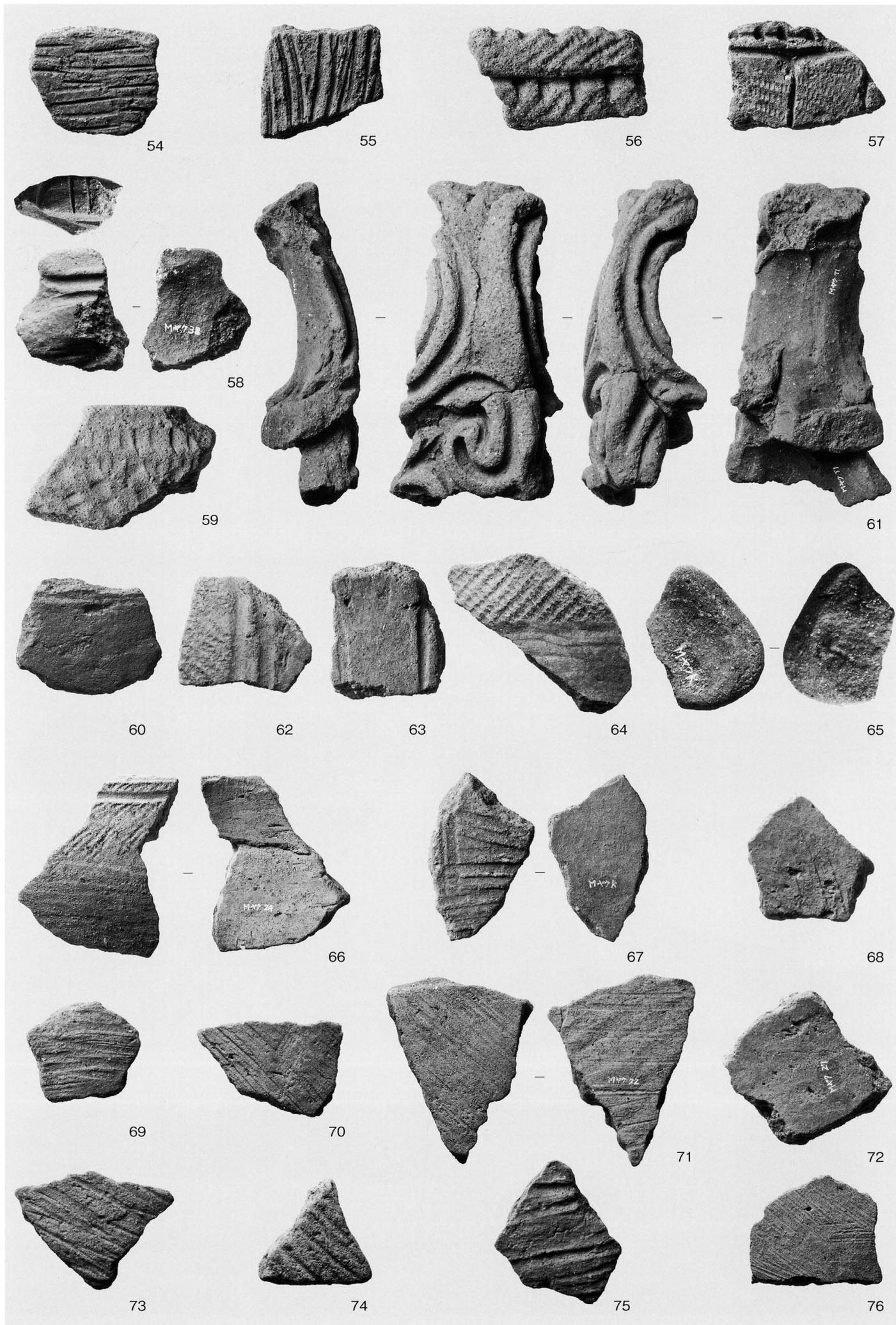


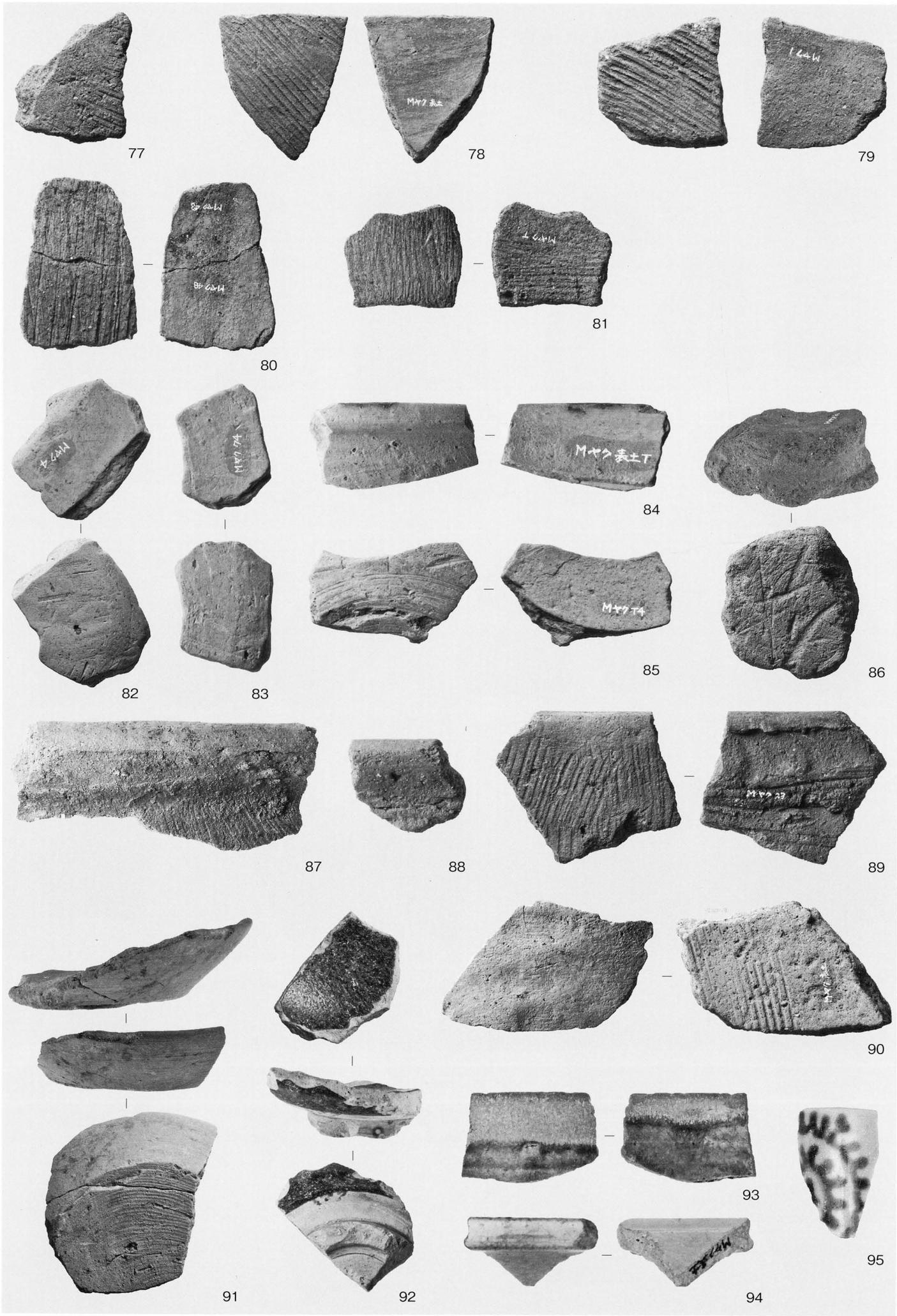
調査区西端



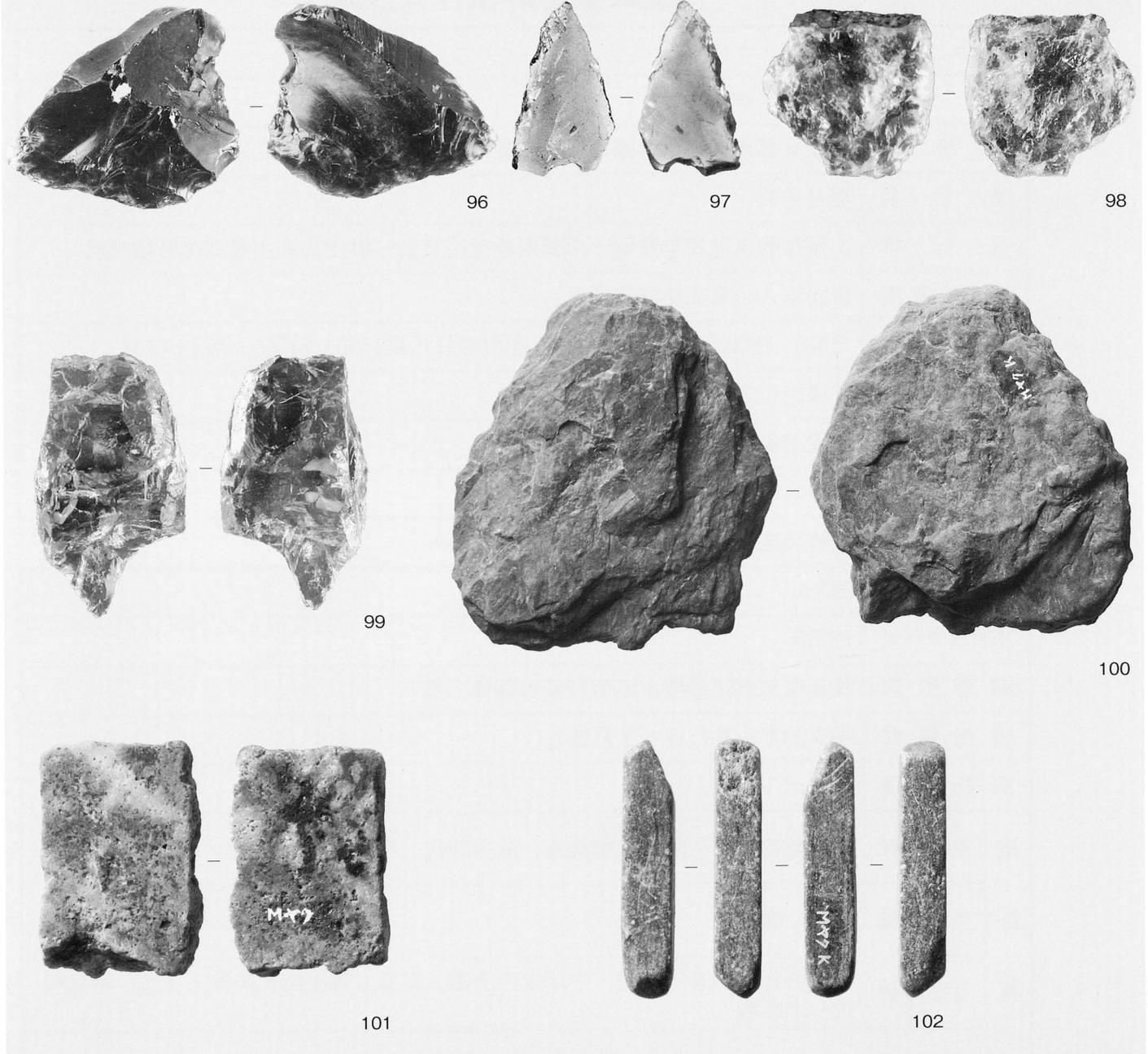
遺構外



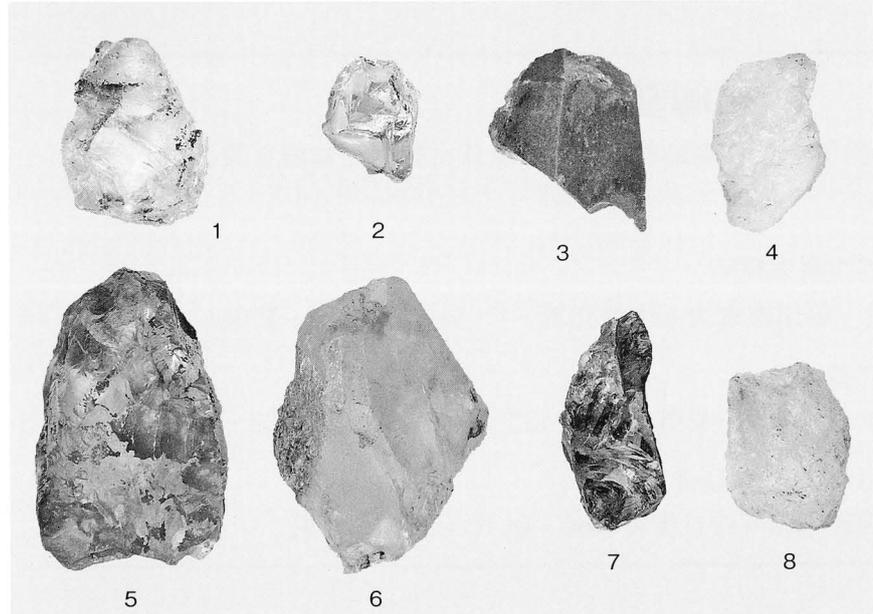




石器・石製品等



調査区出土水晶片



市教委調査区出土 墨書土器



## 薬師堂遺跡報告書抄録

ふりがな	やくしどういせき	
書名	薬師堂遺跡	
副書名	牧丘東部地区用排水路第12号の整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書	
著者名	望月秀和	
発行者	山梨県峡東農務事務所・山梨市教育委員会・財団法人山梨文化財研究所	
編集機関	財団法人山梨文化財研究所	
住所・電話	〒406-0032 山梨県笛吹市石和町四日市場1566 TEL055-263-6441	
印刷日	平成24年3月1日	
発行日	平成24年3月15日	
所在地	山梨県山梨市牧丘町千野々宮・窪平	
位置	北緯35度44分56秒 東経138度42分38秒	
標高	555m	
市町村コード	19205	
調査原因	牧丘東部地区用排水路第12号の整備工事	
調査期間	平成23年1月11日～1月28日	
調査面積	約51㎡	
遺跡概要	主な時代	縄文時代早期・前期・中期末、弥生時代、平安時代
	主な遺構	土坑、溝
	主な遺物	縄文時代早期末・前期・中期末の土器、石器、弥生時代後期の土器、平安時代の土師器
	特記事項	フラスコ状の土坑、地割溝

## 薬師堂遺跡

—牧丘東部地区用排水路第12号の整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書—

平成24年3月15日 発行

編集・発行 山梨県峡東農務事務所

〒404-8601 甲州市塩山上塩後1239-1 TEL 0553-20-2706

山梨市教育委員会

〒405-8501 山梨県山梨市小原西843生涯学習課 TEL 0553-22-1111

財団法人 山梨文化財研究所

山梨県笛吹市石和町四日市場1566 TEL 055-263-6441

